川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十一年三月二十五日　印刷
昭和四十一年四月一日発行（毎月一日発行）
（第七巻）

No. 7

四月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

国立公園 奥新和歌浦
・雑賀崎

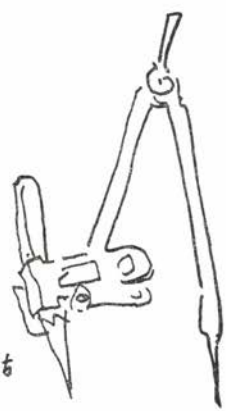
国際観光旅館
うおまたろ
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

今月のことば

中島生々庵



◎自己におもねるまい。自己を軽蔑すまい。これは有島武郎の言葉である。

◎先月もある人から忠告をうけた。主幹は今少し前向きに逞しさを打ち出すべきである。「川柳塔」はいつまでも未熟児ではないからであると。

◎先月のこの欄でも述べた通り「川柳塔」を通じての私の使命感というものを深くしている折柄である。この忠言はしみじみ身に応えた。

◎広い社会層といわず、小さい集団の中といわず二つの型のあり方がある。

自分という者を実際以上に高く評価してあらゆる機会に押しつけようとする者と、反対に自分を軽く軽く劣等視して肩をすぼめた生活するのを謙譲の美徳のように心得る者とである。

◎他人の目を引きたせる、きわ立った評論や積極性も、やむにやまれぬ自分の身内からにじみ出るものでなくてはならぬ。路郎先生が生前機会あるごとに忌み嫌われた「つけやきば」であってはならぬことは勿論である。

◎さらばといって非常に恵まれた才能を持って生れて来ても夭折しては彼岸に達し難い。私達の「川柳塔」は啄木や一葉のような短い生涯であっては絶対に許されぬのである。

◎私達のいのち、私達の生きる尊さというものは、多くの世の中の人達が私達の存在を是非必要とするような私達、こんな私達を育て上げる努力をつみかさねてゆくところにあると私は気付かせて頂くのである。

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば……中島生々庵……(1)

★花と酒……(24)

—同人特集—

大鶴喜由・国弘半休・杉谷湖山・小林孤呂二・林野甦光

浜畑胡蝶・小林孝正・中川晃男・杉原愛鳩

川柳塔……(同人作品)……中島生々庵選……(4)

太田道灌……(川柳戦国志・一)……冨士野鞍馬……(44)

秀句鑑賞……(前月号から)……後藤梅志……(40)

川傍柳初篇研究……(三十四)……(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・

川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・

「川傍柳」の紹介……(下)……清博美……(18)

一本眉の男……（大陸放浪）……東野大八……（22）
雅号ぶつちゃけばなし……築山快夢起……（50）
川柳塔社第二回常任理事会……（43）
近作柳樽……西尾栞選……（32）
大萬川柳「図書館」入選発表……清水白柳選……（52）
金泥集……麻生葭乃選……（51）
作句教室……清水白柳……（48）
★柳界展望……（薫風）……（54）
★本社三月句会……（庸佑）……（56）
★各地柳壇……（文秋）……（59）
一路集
「鍵っ子」……早川清生選
「前職」……山上千太郎選……（46）
「名物」……田垣方大選……（47）
★編集後記……白柳・一三夫……（64）

川柳塔

中島生々庵選

高槻市　若柳潮花

横櫛の膝を舞台の灯へくずし
幻か蝶か保名へ菜種咲く
玄関のブザーへつづみの音がやみ
張りつめた女のように三が切れ
独り寝る襖の冷えを身に覚え
隣席のヒップに袂おさえられ
梅ためて松へ抱かれるように活け

大阪市　山川阿茶

一人ぼっちの古稀
人様の年に思えておかしがり
いたわってくれはるやつぱり年かいな
若い気へいつまで働くつもりだす
養老院へもつてゆく気の金を貯め
御祝儀のするめを喰べてうらやまれ
冥土へはロケツト出来てから行こう

高槻市　傍島静馬

かつぎ屋も食脂動かす石ブーム
三本ずつ三本ずつ洋酒羽田降り
韓国米絞つて灘の生一本
値上げせぬ花見団子がへしやげてる
めつたに一人で飲んで来たとは云わず
下手だとも云えず個性が出ています

大阪市　福井野迷路

美しく悲しく猫の舌化粧
参禅の帰りに株屋のぞいとく
テレビただ阿呆になれと云わぬだけ
家庭にもパパママババの三派閥

確かとは只コツコツと秒が過ぐ
ようは知らずバツハ　ハイドン　ベートーベン

出雲市　尼　緑之助

事件記者哀話もまぜてまだ続き
五男就職
みな出して夫婦老いたりという食事
夜のしじま他郷の子達思う顔
末ツ子を想うライスカレーに甘い物
テレビ又あの子が好きなコンパット

岡山市　服部十九平

先生が突貫させた交叉点
成年式家来のように母を連れ
流れ雲みつめて思うことがない
葬列へ義足の女も歩を揃え
エキストラ筋書などは知らず立ち

今治市　長野文庫

かけ足のポケツで踊る裸銭
書き易い略式の字で立候補
うまいもんだろうが鼻にかかり気障
子に嫁の布石六畳一間継ぎ
新聞は愛人　調書には情婦

大阪市　正本水客

座ぶとんをすすめてみたら去に支度
考えをまとめる顔をのぞかれる
客が帰ってからテキパキと母うごく
こだわらぬ主義とは人が言うてくれ
仲裁のガスライターに眼をそらす

西宮市　若林草右

千鳥足うまもついてく戎橋
雄飛した桂馬にも似て世を終り
ご指名に坐りなおした粋なのど
早よしめた順に市場は店をあけ
声もなく現場はフラッシュ浴びるだけ

岡山県　浜田久米雄

手拍子は倖せという音で鳴り
かげろうの中で倖せ汗を拭き
また一人殖え倖せの灯をともし
栄転の友が新聞紙で笑い
レモンティ切口上を考える

大阪市　本多柳志

寝正月今年も猫にあなどられ
すき焼にする気で戻る空つ風
指サツク妻にせわしい日がつづき

美しく育つて家に落ちつけず
家計簿にかかわりのない酒に酔い

大阪市　金井文秋

検針を胡散臭いと犬が吠え
見栄捨てて暮しに合つたバスに乗る
健康は財産と見て貸してやり
棚卸ぐらいに小売り休まれず
電気代損やと閑を早く閉め

大阪市　後藤梅志

月と東京湾満ち足りし人無にかえる
二代目の芸に幹事の惚れるとこ
ハシゴ車がビルにとどけばビルものび
衝突の現場ライトが地に砕け
早春の神社肥料（こや）しの匂いする

倉敷市　木村千容

敬堂忌僧正の下駄真新し
故旧みな白き息して敬堂忌
敬堂忌叱られ順に香を焼き
小ざかなの味をいればで噛みしめる
娘子群の口八丁に顔負ける

大阪市　中島小石

お見舞がお供えとなる急なこと
聞き役がほしいならばと坐りかえ
乳房探し探し眠つたママの留守

長男夫妻帰日

海路ぶじ祈る心へ風の音
ママの手に孫を渡した気のゆるみ

奈良県　草深酔升

御利益にあずかりたさの鈴を振り
保釈金積んで出て来てまた儲け
筍のように脱いだら細い僕
伸びようとすれば植木のチョン切られ
結婚日ですよと老妻まだ覚え

大阪府　早川清生

共稼ぎの家の屋根だけ雪残る
無数の野心を栄養にして都会肥え
身をもつて戦いいくさの詩を書かず
国債発行　戦中は冬寒かりし

倉敷市　田垣方大

増築をすれば子供はみな巣立ち
人間はだらしないもの終電車
公害の煙が生活支えてる
分校はひばりのひなを育てとり

尻馬に乗つてやるほど暇があり　　児島市　本田恵二朗

恐妻家ときには逆転勝ちもする
さも困つたような顔して自慢する
箸箱をおしいただいて良い家風　　豊中市　戸田古方

くたばれといわれる間生きている
阿弥陀経他宗はあんな節回わし
許されるとはこんなにも怖いもの
膝ぼしが離れ女の淫らめき　　青森県　工藤甲吉

連日の雪いいかげん腹が立ち
あわれそのヒゲも凍える貧しさよ
この音はふるさとの音雪きしむ
受験術ばかり教えて六・三・三　　岡山県　直原七面山

ともかくも顔を見せろと言う電話
汚職する度胸もなくて小役人
死ぬる程愛して世間体など言わず
愛一筋に生きる女の美しさ　　大阪市　橘高薫風

声色は淋し似ててても似ないでも
鼻先きをつんつん歩く好きな人
草の芽が出たぞおしつこさせながら
子を抱けば必ず花と向い合い　　大阪市　宮尾あいき

二回目は上手に産んできりよう良し
バスの席譲る若さを持ち合せ
我心自分でいたわる花を活け
足ぶみでバス待つ寒さはらいのけ　　防府市　長野井蛙

平熱のベッドを見守る千羽鶴
金の無いのが真先に同情し
院長の回診正座して迎え
蟻右往左往していてメドはあり　　京都市　室井八九寸

明治百年古本高くなりにけり
誘われた台詞で誘うふぐ料理
旧正のトイレ橙光る注連
良人の死告げいんぎん賀状の礼　　岡山市　江国幽谷

仲磨呂も眺めただろうお月様
頬白の声もきこえたいいコース
歩いてる人がないのでバスに乗り

七草の名前も知らず摘みに出る

岡山県　大森娯句楽

鞍馬山初詣（三句）

奥の院心打たれて引さがり
牛若は背比べ石で成長し
初詣心浄める瞳をつむり
早合点葬式でなく未だ危篤

新居浜市　小林孝正

昨日に続く今日あるだけの袖カバー
ひばり鳴く任地でラッシュ懐しみ
綺麗どこずらり汚職の匂いがし
人間の弱さ贈答売場混み

今治市　越智一水

略式がよいと仲人こうて出る
カタログの通りに咲かぬ花の色
人生のハンドル妻と代りあい
バラックへバラックの建増し夢があり

岡山県　藤原秋月

ご先祖へ政治の所為（せい）にして離農
盆作の原句なるほど見直され
桜花爛漫まだ借金が払えない
春の土手裸足になつて子と駈ける

奈良市　宮口笛生

伊豆の旅より

石廊崎大寒知らぬ海の風
タクシーをとめて富士山見える丘
お土産の干物がにおう伊豆の旅
鉦一つぎせいになつたラッシュアワー

岡山県　田村藤波

平凡に結婚平凡に生んだだけ
薄墨で書いても麗筆御霊前
座蒲団の綿の吹くまで酷使され
寒い日のせんたく嫁には言いつけず

高槻市　福田丁路

黒枠の葉書眼鏡ふいて読み
裏口へ廻れの謎が解けた顔
大衆に媚びた司会のふざけ過ぎ
残飯をあさる人あり犬があり

西宮市　樋口舟遊

早春の表情はだか樹のびている
欲望にそむいて眠ることにする
砂漠傲慢女の敗北を嗤う
雪解けの水はつしやいで旅に出る

大阪市　水谷竹荘

お見合の話がだぶり迷わされ
発令前に早耳やつて来る
手切金あつさり出せる身ではなし
死ぬ覚悟した仲なのにまだ添えず

松江市　柳楽鶴丸

左遷はつらいが交通地獄からのがれ
重い重いと可愛い孫を抱き歩るき

二十一世紀を夢見て（二句）

オミクジを計算器に変えた大社
世間から二号という言葉消え

ハワイ　羽佐間柳葉

好感を持てと仲人無理を云う
余生まだ煙たがられる役に居り
自由とは足の爪まで赤く染め
貫録の相違対談汗をかき

大阪府　高津徹也

喜雨の来て客自らも縁に立つ
非力の構成悲しからずや蟻の強行軍
女の影も消えて赤い灯の無気力さよ
かたつむりの歩み切々たる焦慮

倉吉市　奥谷弘朗

補虜四年パンの重さも目で計り
へそくりを口にすべらす酔気嫌
出世のためならエンヤコリヤ小役人
匙投げた顔のゆるみがよくわかり

出雲市　原独仙

好きだとはいわず尊敬しています
貧乏性ですよと貯めている噂

石マニア

散歩ですなどと河原で探す石
寝るとこもないのに仰山石並べ

大阪市　中川滋雀

パイ一に誘いこませる風が吹き
お目出度に呼ばれ遠縁の死が判り
どたん場になつてヒモ付きだと囁き

ああ羽田沖

天国へ行くのに海底に放とかれ

今治市　小笠原青女

子の入試ベビーラッシュに祈る母
しあわせをぐつとのみこむ子の答辞
豆をまく今年の声は声変り
好きだとは一度もいわぬ妻をもち

伊丹市　小川静観堂

三面鏡どれがわたしの顔やろか
友遠方より来りてもう四日
石ブーム野仏の顔と見こう見
一人一人べつな涙で抱く遺体

岡山県　浜野奇童

貧農の意地耕耘機へ振り向かず
国道へ山羊が寝そべるのも故郷
忙しい朝へ眼鏡の置き所
ごゆっくりなさいと奥へ行ったまま

善通寺市　岡田彰男

香川県会議員番ノ洲汚職
汚職汚職忘れないでと又汚職
保守革新手を取り合って行く汚職
汚職屁の河童議員でございます
汚職する事も激務の内に入れ

玉野市　小谷仙山

木枯らしを黄色く笑う福寿草
老眼を見兼ね手を貸す針の穴
久方の雪だ子供を叱るまい
節分の楽しく逃げる鬼の面

大阪市　不二田一三夫

原稿紙に書けば悪筆イタにつき
外孫の祖父母に軽い嫉妬して
難儀なことに音痴　うたが好き
老人のくせにクチヤクチヤガムを噛み

京都市　大鶴喜由

君と渡るつり橋なれば空青し
けちんぼのくせに惜しまぬ治療代
三日程して女の言うたなぞが解け

大阪市　市場没食子

春早々昔話に嘘を混ぜ
箸紙に孫の名前が一つふえ
氏神へ孫つれ犬つれ初詣で

岸和田市　内藤きさ子

単車族みんな夫に似た姿
おとなりの改築の音大きすぎ
方円の器となれず女去り

兵庫県　小西無鬼

話し好き聞き度いラジオ止めさせる
　敗戦二十年死歿者叙勲
そうすれば僕の勲章も生きてるんか
初耳と言うことにして改まり

ハワイ　築山快夢起

棺蓋うて始めて知れた貯金高
文化財らしく刻んだ顔の皺
新婚が忘れた頃に礼に来る

下関市　国弘半休

臆病な社長の下でひねくれる
妻の座の不安怒りつぽくもなり
アイデアーわかつて呉れない孤独感

門真市　福島鉄児

寝不足がつづく隣に子が生れ
自動車ショウ別な世界を見て戻り
箸袋集める趣味も停年後

大阪市　木村水洞

北陸、信濃路旅
永平寺托鉢僧の喝をうけ
ともかくも百万石の雪景色
アルプスも門外漢へただの山

竹原市　杉原愛鳩

幼稚園のほうが儲かるお寺さん
借りて来た猫のようなる妻の留守
お嬢さんの恋人形は忘れられ

笠岡市　木山遠二

長尻を嫌う火鉢が冷えてゆき
話相手に恵まれぬ日は畑に出る

耳鳴に悩む

耳が鳴る鳴る聾でもよく聞こえ

神戸市　仲どんたく

なじみ客酒あてごうて放つとかれ
同郷かそれはそれはとグラス酌ぎ

2/4全日空機遭難

遺体眠る強風波浪注意報

美禰市　安平次弘道

投げ売りのビラ暖冬の陽がまとも
出稼ぎ村　女ばかりの雪おろし
予想屋の強気自分も買つている

芦屋市　丸川初甫

砂よけて鶏はつまらぬ顔をする

京の顔見世

花道の濡れ場へ桟敷つめよられ

花道評議員を拝命

評議員花の腕とは別なもの

諫早市　川岡霊眼子

青磁器の馬が今年の艶を出し

みの過ぎに母へ味方の眼がとがり
ご幣背に神馬のひずめアスハルト

大阪市　児島与呂志

残り福まけてもろたと笹の泥
満員を承知で市電待つ老母
妻の背にたよりかかれる今日も無事

大阪市　今西章雅

身の程も知らぬと夢を叩かれる
推薦入学表口から寄附をとり
物干へ近火の風向き確かめる

堺市　冨岡淡舟

いみじくも同郷なりし恋ごころ
日曜の余暇を楽しむ電気鋸
所在なさ近所の犬と戯むれる

大阪市　河井庸佑

この人も裏から来たのかと思い
頭から足までざつと見積られ
望まれて嫁つて姑ともめて出る

高槻市　山田季賛

ストーブで人の栄転聞かされる
雪解へ楽しい春よねこ柳
金借りに行く旅の不倖せ

加賀市　那谷光郎

物価高生活はうがいの鵜にも似て
チグハグの下駄で癇癪どなりに来
喫いさしをくの字にすてる待ち呆け

倉敷市　野田素身郎

吊革があるのに夫にすがりつき
美田つぶして建てた工場がもう潰れ
客は酔いつぶれてるのにまだ歌い

広島市　弘津柳慶

それからを女大胆に生きて行き
羽子板の仲間になつた屠蘇の酔
消印から差出人を判断し

鳥取県　田中蛙眠子

酒飲みの友情俺も泣き上戸
調理場へ味ほめといて借りて去に
劣等感こんな女へどもりがち

大阪市　西出一栄

コマーシャルのように聞いとく老の愚痴
　嫁の妹の結婚式に列席して
かい添えのない花婿の足しびれ
花嫁の今日は人形になりすまし

下関市　桜川不水

孫一人ふやして二男年賀に来
甲高い声が寒波を走りぬけ
さあ咲いた咲いたと春がせき立てる

小松市　関戸宗太郎

おむつ干す下でセイルスまだねばり
正直に書いてせつないアンケート
眼帯をはずして零を読みなおし

堺市　高崎雄声

関係のないのへ怒りぶちまける
安い方の床屋が暇なのも世相
己には克てず今日も縄のれん

竹原市　山内静水

丹仙で薪割る父の老いを知り
神主がふれば榊は風を切り
絵日記を書く子へ定年ふと思う

加賀市　野村味平

小商人となる

癇癪を起し売れない日を戻り
商売は面白いのと擽られ
女房にがみがみ云われ荷を背負い

呉市　林野甦光

ステレオは近所へ聞かす位置で鳴り
女また話しの腰を折つて去に
電話おくときは女の顔でなし

大阪府　西いわを

大袈裟に云うて子供へ智恵をつけ
夕めしに早く帰つて家の味
古い家おぼつかなげに立並び

島根県　藤井明朗

雪の道郵便さんにお茶を入れ
親馬鹿の子はそれほどに思ていず
定年はなし庖丁の冴えを見せ

岡山県　横山一声

生返事したら支払いに来たという
失保もろうてる間に取る免許
頓死した例を保険屋強調し

愛媛県　村上旭童

山茶花になんの寒さとはげまされ
兄弟でもりたてている飲んだくれ
長いものにまかれていては食うてけず

京都市　都倉求女

お上りが云うので見なおす本願寺

誰にでも判る匿名で逃げてあり
口惜しさをコツプで計るように酒

岡山県　池田古心

無信心最後の息へ経唱え
内職へ忙しく夫ほつとかれ
節分が過ぎたと猫は知つて居り

大阪府　谷沢好祐

味じやない菓子は漫画で勝負する
命日に帰れば甥の誕生日
合格の数字無心に並びいる

大阪市　川口弘生

もう勝負あつた感じの四十才
ぼろくそに云われてる間　母達者
医者の病気他人事みたいに説明し

小松市　馬場魚山

亡妻の笑つた写真気に喰わず
葬式が済み墓のないのに気付き
入口の雪だけハネて共稼ぎ

大阪市　天正千梢

コマーシャルだけ聞いてりや人間死なんらし
神様はどの子も落とす事出来ず
粒よりの中の十人粒よりし

大阪市　宮地双楽

目も持たずブームに踊り石探し
瞑想に耽ける光陰無駄が消し
終戦に生まれ入試のこの苦労

笠岡市　松本忠三

平民が犬の血統鼻にかけ
暴力はいかんと亭主の方が言い
病欠にしては血色の良い出社

芦屋市　松下たつみ

宿題がすんで親子の顔となり
珍客へ母は記憶のありつたけ
ライバルと知つて助言の口をとじ

兵庫県　遠山可住

おつさん何言うてんのやと二十
日めくりが俺を四十に持つて来た
へそくりが子の指切りへ追いつかず

出雲市　中川晃男

ベレー帽下にはやせた皺の顔
土俵際のこたつで初場所見るテレビ
お先に御免とスキー滑り抜け

富田林市　浅川八郎

法文の抜け道へ人情裁判長

入会のすすめショックの老人会
憤満をこぶしの中へしまつとき

布施市　渋谷三時

年寄の放屁けんこう管理する
補強できぬ明治作りのこの躯
穴場なぞ知らず若駒よく走り

兵庫県　河原みのる

寒雀只今交際進行中
投げキッスの受け型孫におしえられ
　廃品を売りて
僕の価値ポンコツとしていくばくぞ

京都府　西村句楽坊

俗塵を払いあの世へ行く用意
生る為死ぬ為今日も箸をとり
やけに鉦叩く所在の無い孤独

守口市　羽原静歩

　松山紀行
坊ちやんが食べた団子を僕も食べ
奥道後儲けた顔がつかつとり
　来島紀行
磯の香と土の香りを吸い歩き

枚方市　宮川珠笑

寒風へ金策出来た胸を張り
星空へ明日も働く職があり
絵に画いたような富士とは陳腐だね

福岡県　太田湖平

四月馬鹿年度始めの一休み
月旅行リユーマチ薬出来もせで
悔むまい米寿の母がコトリ逝く

富田林市　岩田美代

姿見へまだ物足りぬ顔で立つ
装いに酔い疲れ乍ら気を晴らし
後悔のかけらもないのを満足し

守口市　村田瓢太

友情も賀状に名残りとどむのみ
肩書へだけ挨拶をするつもり
恋愛か見合かと子等にたずねられ

新居浜市　近藤凡生

春の雨トタンの屋根に哀愁譜
グツト抱き締めてやり度い入試パス
梅鉢の窓のそこから春が来る

新居浜市　安藤桂仙

アベツクで来いとベンチは出来ており

日帰りを女房いそいそ身づくろい
スリッパもくせが出ていた右左
八尾市　宇佐美彰大

この頃は肌着が気になる五十過ぎ
観光客アルサロへ来てバスをまき
ネクタイ部売子の腕が七八分
大阪市　大坂形水

ドアーの鍵かけると個室狐奇めき
うかつにも子にくずかごを教えられ
布施市　森下愛論

廻転椅子言葉づかいも替って来
窓口の早口ポカンと顔を見る
松江市　小林孤呂二

借りて建て借りてまでして自家用車
霰霰　新聞少年の靴の音
鳥取県　渡辺乱坊

事業を始める夢は夢で済み
冗談が言えて夫婦の味を増し
平田市　久家代仕男

出稼ぎの単車続いて春の泥
スモッグの無い故郷もせち辛し
兵庫県　大江秋月

つり銭が目当てお使い行ってくれ
鉄筋のアパートおしめひるがえる
鳥取県　清水一保

口論をするくせ留守をさびしがり
終バスに遅れ親しい仲となり
加賀市　大山雅城

来年から実行しようと十二月
市長市議選挙
候補みな低姿勢なる可笑しさよ
高砂市　吉原紅月

つまらないことに男を売りたがり
日向ぼっこして居るように椿咲く
大阪市　室谷鉄舟

一人つ子に期待をかけたランドセル
叱つたらシェーと子供に茶化される
下関市　原千里

数の子が食べたいなどと初笑い
どこでどう工面みなさん家が建ち
加賀市　細呂木魯木

女史と云われる妻へ夫の座が崩れ
信じない暦も節分の豆をまき
三次市　和泉松風

愛情で見つめた雪の山の肌
寒い晩もう一本と低姿勢
大阪市　本庄金三

ケロイドへまだ戦争の爪のあと

配達夫草書も読める人と知り

香川県　三井酔夢

相舞の娘の手は丸く暖かし
風向きが変り女は泣いて勝ち

—自選—

川村好郎

亡母四十年祭
喜んで欲しい偲び足らない掌を合せ
ふんがいを殺し切れないドアの音
靴みがき姿勢よいのもあわれなり
極楽は地獄の奥とわかりかけ
今宵逢えば別れるつもりまではよし

北川春巣

建設私債うちも出したい春が来た
細長うやつてまんねん平社員
眼尻のシワのばし手のシワ隠されず
深夜放送テープ取るためヒル寝とき
新婚のセツトの旅で来たいで湯

西尾栞

操短の工場の上の揚雲雀
商売の方もコレストロールたまりだし
スペアーというは二号のことなりき
一度二度蹴つてからする拾いもの
駅弁の箸へ雪の立山真正面

若本多久志

ハネムーンに発つ娘へ何か言い忘れ
隣までカラーテレビが攻めて来た
ものわかりいい親になるこの苦労
親ゆずりですと短気を言訳し
やめたくはないのに勇退という讃辞

菊沢小松園

無理をした金に水引掛けて出し
春一番花のいのちをこじれさせ
腹上死此の世に未練ないかたち
離れては淋しく寄れば喧嘩する
散髪の文句の言える顔かいな

中島生々庵

冬の蠅陽だまりに春を吸いに来る
右顧左眄結局どん底で腕を組み
媚びに馴れ貧に馴れ度胸らしいもの
二日酔する程飲めぬ老いを知り
夜長に炭つぎたすに似て無事な日々

松江梅里

類焼をまぬがれ保険はいらされ
母性愛炎の中をかけめぐり
後悔をしている思い出し笑い
もう後妻でもと折れてる三十代
芸術と讃えヌードをさげしまず

清水白柳

群集移動すパトカーを追うごとく
世帯をのぞかれそうでカーテンを重ねる
椅子の堅さに文学をもてあます

「川傍柳」の紹介（下）

初篇輪講の掲載に寄せて

清（せい）　博（ひろ）　美（み）

三、当時の川柳界と他の文芸界

ここで少し「川傍柳」からはなれて、当時の川柳界および他の文芸界をのぞいてみよう

川柳評万句合興行の明和、安永期は、先に述べたように、いわゆる春期版万句合も盛んになり、その結果「川傍柳」を初めとする数種の組連句集が刊行されたわけである。

川柳評万句合の第一回興行は、宝暦七年八月二十五日で、その時応募された句はわずかに二〇七員、入選句としたのは一三句だけというお粗末なものであった。

しかし、初代川柳の選句眼がすぐれており また「川叟（初代川柳）の評は正道を専らとして、いささかも贔屓の沙汰なし。故に年毎に寄句増員す」と「柳多留」七篇の序文にもあるように、その選句態度が公平、慎重であり、その上当時の江戸っ子の嗜好に叶ったため、次第に応募句も増加して、五年後の宝暦十二年には、三回続けて十日間の投句が一万句を突破するに至った。

その後、明和二年に呉陵軒可有が、川柳評万句合の中より「一句にて句意のわかり安きを挙て一帖」とした「柳多留」を出すと、これが大当たりとなり、そのために川柳評万句合も空前の成功を収める結果となった。

しかし、「柳多留」の成功は、その後五七五の付句のみを喜ぶ風を生じ、安永初期になると前句題無視の傾向が著しくなり、万句合における前句題は、儀礼的、装飾的なものになり、事実上は前句附ではなくなってしまったのである。

また、「柳多留」は、五篇に組連名を掲げたのをはじめ、六篇では作者三五名の名を発表し、引き続き八篇では五〇名を列記するなど、作者名公表の傾向を生じてくる。そして九篇以降は、作者名公表のもとに、シーズン外の角力句合、奉納句合などの入選句をその巻頭、巻末に収録するにおよんだのである。

前句題は、作者の発想をうながす重要な役割を果していたのだが、この前句題を失うと作句の焦点がぼやけ、また前句付の本質である付合の妙味を忘れて、漠然と句を作るために、作品の質の低下を招いた。また、作者名公表の結果は、作者層の増大に役立ったが、その反面、無教養な売名分子の増加を招いて前句題の無視とともに、作品の質を低下させ作者の質をも低下させる結果となったのである。

結局、明和、安永期の川柳評万句合は、「柳多留」刊行にもとづく前句題無視と、盛んになって来た春期版万句合のために、かえって窮地に追い込まれることになり、安永八年の惣句高二万五千余を最後に衰退を始めたのである。

加えて、安永末期には初代川柳六十余才、呉陵軒可有も共に老いて、新時代の流れにとり残されつつあったのである。

江戸における他の文芸界は、宝暦末期頃から知識層庶民によって次第に開拓され、盛んになって来たが、特に川柳評万句合と同じ題材を扱う洒落本と黄表紙は、安永、天明期に至って爆発的な隆盛をみたのである。

洒落本は、明和七年に「遊子方言」（多田

爺」と「辰巳之園」（寐言先生）が刊行されると、類似の書が続々と刊行されて、大流行となった。

また、黄表紙も安永四年に「金々先生栄華夢」（恋川春町）が刊行されると、次々に類似の作が刊行された。

このように、明和、安永期は、同じ題材をあつかう川柳評万句合が衰退を始め、洒落本黄表紙などの文芸界が隆盛期を迎えて、その両者が、対称的な存在を示した時代であった

四、「川傍柳」の意図とその結果

さて、今までに「川傍柳」の成立の過程およびその内容、そして川柳評万句合の推移などについて簡単に眺めて来たが、これらを綜合して、「川傍柳」が刊行された意図およびその結果について、一つの推定を試みようというわけである。

川柳評万句合は、前句題無視と春期版万句合の盛況による定会への魅力減少および初代川柳の老化などにより、明和、安永期に衰退をはじめ、洒落本、黄表紙にその人気をとって代られつつあった。

一方、春期版万句合の活潑化によって刊行された「川傍柳」は、初瀬連の消滅以後の組連の異動と活動および朱楽菅江の参加、そして洒落本風な多彩な序文と遊里句および破調句の増加などから、不振に陥った川柳界に新時代の感覚を注ぎ込み、川柳点を時代に即した新しい文芸に発展させようとする意図と努力の現われではなかったかと思われるのである。

しかし、この意図と努力は結局失敗に終わり、川柳評万句合の惣句高も、天明元年は七千台、二年は六千台、三年は四千台と次第に減少し、句の質の面でもその低下を更に強める傾向をたどったのである。

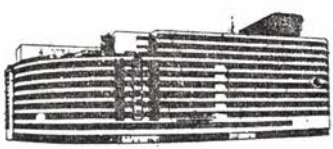
川柳評万句合衰退の原因が、前句題無視による作品の質の低下と春期版万句合の盛況による定会への魅力減少である以上、川柳評万句合から組連句集刊行に至るまでの様々な過程とその結果の「川傍柳」は、むしろ川柳評万句合衰退の原因を集約した句集であったといえる。

この本質的な矛盾に気付かず、いたずらに洒落本風な序文と句、あるいは破調句の増加をもって、川柳界不振の打開と新時代文芸への発展を試みたところに、「川傍柳」の失敗の原因があったと思われる。

「川傍柳」は、結局大きな目的とそれに対する努力を試みたにもかかわらず、その題簽の文字が示すように「柳樽余稿」の範囲を一歩も出ることが出来なかったのである。

川柳界を再起させるためには、結局宝暦、明和初期の前句付にもどるか、あるいは既成の川柳評の秩序を大きく破る革命的なエネルギーが必要ではなかったかと思われる。天明期には「川傍柳」の外に「藐姑柳」「柳筥」「柳籠裏」「玉柳」などの組連句集が続々と刊行されたが、これらの句集は、いずれも「川傍柳」のような意図をもったものではなく、作者名公表の魅力による流行的現象に過ぎず、こうした春期版万句合風のものが、川柳評万句合の不振を更に強める結果となった、と考えてよかろうか。

（川柳雑俳研究会会員）

最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと
ハンシンは
皆様の百貨店です

大阪梅田・水曜定休
阪神
電361—1201〈大代表〉

川傍柳初篇研究（三十四）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須啞三味
清　博美丸　十府
藤井和雄　岡田　甫

396　罪な事めぞの無ひのととりかへる　一甫

清＝「川柳大辞典」によると「めぞの無い」ということは〝裁縫を知らない〟という意で「めぞ」は〝めど〟の訛音、すなわち〝針の穴〟をさしたものとなっており、句解も〝女房を出して遊女を家に入れた〟句としてあるので、それに従っておく。

高須＝女房と相談をして妻を去り（タル一四）で、料理も裁縫も出来る、実直な妻を、何が不足でか追ン出して、針の道も知らぬヒキズリ女を、女房に直した。馬鹿な男を詠んだ句、でよいと思うが……。

丸＝大辞典の説を裏付ける文献に、未だ接せず、と雖も反論もなく、一応大曲説の解釈に従う。

岡田＝反論あり、メゾ（またはメド）は針の穴のような狭い穴のことで、吉原では一人の遊女に客がダブルと、Bクラス以下の客へは、若い新造を名代として出し、客のつれづれの話し相手とさせた。ただし、この名代の新造には、手を触れることの出来ないのが、吉原の鉄則であった。すなわち、名代の新造は〝女にして女に非ず＝メゾのないのも同様〟だ、という意である。

句解をわかりやすく説明すると、馴染みの遊女と話している客の所へ、妓楼の若い者がもみ手をしながら入って来て「今夜は差し合いまして、甚だ申しわけございませんが……」と、名代と取りかえられる。かわりに来た名代の新造は、女にして女に非ず、使用不可能品では、何のために遊びに来たのか、わからぬ。全く以て「罪な事」をするものだ……というのである。

藤井＝「めぞの無い」を〝裁縫知らず〟とは、成程なと感心したが、岡田先生解で〝穴なし〟となって、又々感心、古川柳解のむずかしさを、今さらに知った。感謝。

397　押入で扇で湯などはりこぼし　門柳

清＝これまた、素人芝居を詠んだ句、と解しておく。扇ではりこぼした湯は、茶飯用のものだったのであろう。

藤井＝素人芝居ではなく、素人講釈の張り扇で、釈台の上の茶碗の湯を、張りこぼしたのである。夢中になって、前に置いてある茶碗を倒したところ、いかにも素人らしくて、可笑しい。

川端＝礎稿どおり素人義太夫と思う。下手な義太夫が長く続いているので、腹立ちまぎれに、ばたばたと扇で火をあおぎ、手元が狂って、湯をはりこぼした。

高須＝そんなに回りくどく考える必要は

あるまい。この「押入れ」を〝舞台〟として、演じられている素人講談で、いい気持ちで熱演する釈師先生、つい熱が入りすぎて、前の茶碗を倒した、という藤井説賛。

前田＝私は「押入れ」とあるので、清・川端説と考えるのだが……。

丸＝これは、藤井・高須説の素人講釈の方をとる。

岡田＝義太夫は、扇子を持って高座へは上がらぬから、やはり講釈である。

398　**いびられに行くが女の盛り也　　嵐　弓**

藤井＝番茶も出花で、男からひやかされたり時には尻をつねられたりしていじめられるのが花の盛り。又それを承知で盛装していびられに出かけて行く。裏をかえせば、いびられないようになったら女もおしまいだとの句。

川端＝顔も姿も、また着物も綺麗なものだというのではなく、いびられることが女の盛りだという事は、客の自由になる遊女の年齢と解する。即ち遊客に招かれる内が女の花である。年老いてくるといびられるどころか、見向きもされなくなる。

高須＝柳雨翁は「嫁入り」と言っているが礎解の素直さが好ましい。句面通り、それでよいと思う。

前田＝「いびる」からくるものは、矢張り主として嫁に対しての虐待を思うのは常識であろう。また「女の盛り」は嫁入りの適齢期であろう。句意は勿論、姑に「いびられに行く」こと、即ち嫁入りを意味することは柳雨説に賛。でないと三氏ともふれていない「行く」が活きない。

岡崎＝前田説に賛。いびるのは姑である。川端説の遊女があたらないのは、遊女は普通十五・六才で身売りして十八才で見世に出、年季十年の定まり。そのまま無事に勤めれば二十七才で年明き。女として見向きもされない年頃でもない。

清＝前田、岡崎説に賛。但し、いびるのは姑だけでなく、小姑も加わる。

末ながくいびる盃姑さし　　（拾初35）

小姑も見よう見真似でいびる也（笹四21）

丸＝前田、岡崎、清説に賛。姑は嫁をいびるもの。この川柳観念から嫁入りと見るべきである。

岡田＝同。

399　**おしい事月にたとへる物をとり　　一　甫**

藤井＝人妻となれば眉毛を剃り落す風習があった。主題句は

顔にあざ二つ出来るおしい事（傍初22）

と同意な句で、おそらく評判の小町娘の事だろうが「月にたとへる物をとり」の方が表現が綺麗である。

高須＝「顔にあざ」も一甫の句。こうまざまざと類句を二つも作った作者も作者だがどっちも「惜しい事」と言っている。こんな相似句を二つ抜いた選者も選者だと僕は感心しない。

前田＝高須説よろし。常識的な句。

岡崎＝古川柳には先行句の趣向を踏襲する傾向があって、類句たくさんなのが、ひとつの特徴となっている。このため納得の約束（たとえば信濃者＝大食漢。相模下女＝淫乱女など）の観念の固定化をもたらすことになったが、これは初代川柳後の川柳を狂句に堕落さしていった素地のひとつともみられる。――とすると、このような類句は、それなりに受け取っておくのも面白いし、意義がある。

清＝現代川柳作家の方々は、こうした同想句、或いは観念の固定化がお気に召さないようである。もっとも柳味にとぼしい点もあるが、しかし、古川柳を研究するという立場にたてば、これはこれとして岡崎氏のいわれるようにそのまま受け取る必要があろう。句解にもどって、藤井氏は「人妻となれば眉毛を剃りおとす風習があった」といわれているが、これだけでは説明不十分で、女子の場合、婚期か或いは結婚してお歯黒だけを附けるのを平元服といい、更に眉毛を剃り落すのを本元服といい、本元服は通例は懐妊あるいは分娩の後にしたものである。

丸・岡田＝諸説につく。

一本眉の男

―大陸放浪―

東野大八

白系ロシア人ニコライの眉は、まるで顔の上部に毛筆で一の字を引っぱったように左右ぶっ通しの一本だった。

汚い膿細工製みたいな、すべすべして生白い此奴の膚に、その眉は悪いことに黒毛だった。

大体がロスケという奴は、ハルピンの街頭で見かける限り、ほとんどが金色かカッ色である。

そんな民族の生理に関係なく、ニコライの所有物はまるで日本人のように黒々としていて、おまけに横一文字ときていたから誰の眼にもイヤでも飛び込んでくる。

現地人の満州国人は、その眉をことのほか蔑んで眺めていた。古来中国では、眉清きをもって貴相とし、ひげ長きをもって貴仙とするお国だ。ニコライはそうした中国人の眼には異相というより奇相と映じ、僕の中国人の友人など「妖眉」と断じてあけすけに顔をしかめていた。

もっともこの男は、眉だけでなく顔全体が変てこであった。

黒一本眉の下にギロリと光る眼玉は、可愛想に青いガラス玉をはめ込んだようで、葬式提灯の折れた骨が出ぱった下には、切開手術をしたような唇があった。顔が菱形なのも具合が悪く、まるで洋式の鞍馬山の烏天狗だ。

僕とヤッコさんの出会いは、ロシア人の働く若い娘たちの座談会の席上で、そのときの通訳が彼だ。すばらしく日本語がうまく今でいうならロイ・ジェームス級だ。眼をつぶって声だけきくと、全く江戸前のお兄哥さんだ

「一体どこで覚えた」

と仕事の後できくとハマだという。それだけいうと「今日きた女の五人のうち、四人までがお前さんのいうことをきく女」と下卑た笑い方をして、あとの話をゴマかしてしまった

彼の職業は洗濯屋の外交員で、日系のあらゆる会社に出入りしていて、誰からもその日本語の抜群さがモノをいって可愛がられた。彼を僕に紹介したのもさる会社の重役さんからだった。

こういう特技を持つ彼を重宝がって、僕はことあるごとに彼を呼び、仕事をさせたほか、さかんに悪所通いのガイドもやらせた。

彼はケチなくせに女に底抜けにヨワく、伝法なくせにケンカはからっきし弱い。おかげでヒマさえあると日本人の僕んとこへやってきた。めし、酒、ときには女郎屋までたかられるし、その上、座談会や、内地からの客の通訳という内職にありつけるからだ。

「親分ござるかい」

「兄い、一丁ケリにいくか」

と折をみてはもみ手しいしいやってくる彼。その調子のよさは無類だ。根が洗濯屋だから万事安ものでもみなりが小ざっぱりしている此奴だけは僕も気に入っていた。

マルスやモデルン、さてはデパートに働く若い女など、ロシア人の女なら、彼にかかると忽ちイチコロ、必ずといっていいほど僕の前にその相手はエキゾチックな肉体を現わした。アレといえばオーケーし、コレといえば承知のすけ、その確率はまさに百パーセント

だった。
あるとき、こういう交友の彼を三河のカサック村に連れていった。三河は満洲国におけるエミグランドのユートピアだ。独自の営農村落で知られ、そのルポを僕が受け持つからだ。
北満のアムールの雪はるかな青い風の中に白樺の丸太小屋が点在し、みはるかす青草の沃野には、乳牛や黒牛や山羊や小豚が放し飼いにされていた。
そこのとある大きな洋館で、私たちは一人の中国人と向い会っていた。小男で苦力みたいな汚ないこの男は、しかし大地主なのだが出てきた奥さんをみて、僕はアッといった。金髪のすごいグラマー美人で、当時のアメリカの美人スターロレッター・ヤングの再来かと思われるほどである。僕は生ツバをのんでその愛嬌の泉のような奥さんにみとれ、たちまちイかれた。が、連れの彼は、部屋の隅で去勢された犬のように小さくちぢこまっている。
「ニコ、一体どうした?」
と僕がそこを出るなり、そうとがめるようにいうと、二足、三足さきを歩いて彼は弱々しくふりかえるなり、
「すみません、あの二人は夫婦で、この間に出来るであろう汚い子供と同じしろものがこの私なんです」
とつぶやくようにいった。
その言葉のあと、僕をみつめた彼の眼は濡れたガラス玉のようにやけにすき透っていた彼はロスケと中国人のあいのこだったことに僕ははじめて気づいたのだ。
帰りの汽車の食堂車でニコは
「あんたが生ツバを飲んだ細君ね、ありやあ惜しかった。あの日でもあんたといっしょに寝てくれたのに……。エミグランドの若い娘連中、特に若い細君は、催せば紅茶一パイでも喜々として転ぶんですぜーどんな奴にでもね」
そういってカラカラと彼は笑った。
その語いんに虚しいものを感じて、僕はひたとその顔をみた。眉は二本に切れていた。明るい顔だ、そう心のどこかで思っていたのがこのせいだったのだ。
彼の眉は、予想外の金が入るたびにその真ん中を剃るのだ。三河へ行くといったときも彼は同じ血の通うエミグランドの村というので、礼装用に鼻上の眉を切り離していたのである、いじらしい奴—。
「ハルピンへついたらニコよ、思いきり今夜は飲もうよ」
僕はそういって彼の顔へ笑った。
こんなことがあって数日後、ハルピン特務機関から召喚の電話をうけた僕は、何事ならんと飛んでいくと顔見知りの機関長のF氏は
「この男とじっこんだそうだね」
と一枚の写真を僕の前にほうり出した。
「アッ、ニコ……」
「そうだニコ、通称はね。本名は何んとかスキーで、何を隠そう筋金の入ったゲーペーウーの手先だ。まあそれはいいとしてこれからはこんな妙な男とつき合わぬ方がよろしい本来ならばタダではすまない」へたへたとソファーにくずれおれた僕へ、F氏は鋭くこういって、きめつけるように僕をにらみすえた。あとできくとニコは銃殺刑だった。
終戦後、F氏もソ連に捕われ、そうして彼もまたニコライと同じ運命をたどっていった
今も僕は、眉迫る顔に出会うたびに、トロイカに肩を並べ合ったニコライを想い出す。アストラカンの防寒帽を真深かにかむり、パピロスをくわえたその貌は、もはや道化もの、あのニコライの一本眉の顔ではなかった。

大陸柳人同窓会

今年は九州九重温泉（別府阿蘇の中間）にて八月二、三両日二泊で催す由、
目下九州大陸柳人によって準備中。
問合せは　北九州市小倉区黄金町三・
出口夢詩郎
又は、姫路市豊沢町一三一・
大井正夫

花と酒

花があるから酒がほしいのか、酒があるから花を見に行きたいのか、ま、そんなセンサクはどうでもよろしい。とにかく酔う人のいない花見風景なんておよそセキバクたるものでしようからね。……

花の記憶

大鶴喜由

奈良朝以後ぐらいからか花と言えば桜の花を意味され、美と風流の対象にされた。この花が家の庭にはあまり見かけられないのは、育ちにくいのか、散り際があまりにも本意ないのかどちらかであろう。シーズンともなれば町内や職場や気の合った連中などがどしどし出かけて行く。花の下でさわいでいる人や、離れて風流感にひたっている人もいる。「酒なくてなんのおのれが桜かな」文句そのままを見せつけられる。私の記憶に残る花見と言えば、

九段のさくら

靖国神社へ続く九段坂の桜が三丁も四丁も満開で美しかった。この花の一ひら一ひらにお国のために戦った勇士の霊がいられるような気がしてげんしゅくな気持になった。

迎賓館の夜ざくら

さすがに外国の貴賓を迎えるところだけあって庭らしい庭に出来ている、緑に添うように桜の大木があり、それを照らすライトに花が絵のように浮きぼりされる。

円山公園のさくら

四条通りから公園に入ると小高いところに枝垂桜が大きく孤を描いて咲いていたが、なんと言っても枯れた先代の桜の方が貫録がある。ここから西に東にさくらが散在していて花見の宴がはられる。時折り舞子の姿が遠く近く見かけられる。

御室のさくら

集団の八重桜が見ものである。客は早くから宴を張り其他の大勢は、花とさわぎをながめて通り過ぎて行く。

平安神宮のさくら

有料の園内に入ったところに枝垂桜があり目も覚めるようなピンク色をした二十畳もあるかと思われる大きな花の傘が空からぶら下がっている。ただ驚きの一語につきる。

造幣局のさくら

花時より半月もおくれて造幣局の通り抜けが許される。お金の栄養が効いたのか肉のもり上りのゆたかな処女を思わせるような八重桜が四五丁も続いていてそっと手を触れたいような気持ちになる。ところがその横に「花に手を触れないで下さい」の立札があった。

吉野山のさくら

ここは満開どてからとろとろと降りた草原で宴を催した。ここから中千本は緑の中に淡い煙のように霞んで見えるのは今が二分咲き位か、奥千本はまだ何も見えない。「花に寝てよしや吉野のよし水の枕のもとに石(いわ)ばしる音」を身をもって体験した。

花見酒妻まだ若きものをもち
花曇り無沙汰の孫に歩を運び
たかが雄しべと雌しべのたわむれを
二歩三歩酒が命ずるまま歩き
酔いさめの目の上に頼り切る妻の瞳が
花売りの大人の仕草して買わせ

（喜　由）

観桜会

国弘半休

山口県の萩といえば毛利元就以来、維新の三傑、吉田松陰、高杉晋作、昭和になって、田中義一、久原房之助、野中三造、それに川柳では井上剣花坊と偉人傑物の多く出た所で萩城趾は市にそそぐ阿武川々畔の桜と共に花の名所でもある。

今から丁度七年前、私はこの萩城趾で開かれた日通の観桜会に招かれた。

ハイヤーを降りて城の外濠に架った橋を渡って、土壁に添って奥に進むと右手に白砂青松の菊ケ浜を望み、左手に天守閣趾の石垣だけを見て、樹齢百年以上に及ぶ桜樹の林に至る。時まさに満開、境内のみどころと思われる個所には紅白の幕を巡らし、ござを敷いて花の春を謳歌する仕組みとなっている。

花見と言えば、酒、酒に女はこれ又添ったもので、この日もまた御多聞に洩れず招待客三〇余名に萩検番の奇麗どころ、御女中衆と十名余りの奉仕者が各々の意匠をこらして、それはそれは誠に豪華な観桜会が催された。

平素謹厳で正直な（私だけが言っている）不肖半休もこの日ばかりは「名にしおう桜花の下」美酒美女に囲まれ、しかも客賓とあってみれば、聊か浮かれることがあってもお許し願えたことと思うがとにかく後にも前にもこれ程飲んで踊って愉快になったことはない。

酒飲みの癖には泣き上戸に笑い上戸、喧嘩太郎に自慢師と色々にあるが不肖の場合は「寝入込む」というのであって一応人蓄に害を及ぼすものではないがさて眼が醒めて反省のつかないのには我れ乍ら情無くなる。

落陽と共に浜辺から来た冷たい風が頬を撫で、我れに帰って四囲をみれば、辺りに友もなく、ござ一枚に名刺と私を残して、みなはとっくに引揚げており、私が咥えていたであろうピースは口惜しくも新調のスプリングコートを見事貫通して跡形もなく灰になっていたのである。

肝臓が弱っているからといって最初から断って「赤い鉢巻きをした銚子のジュース」を酌いで貰って接客応対に懸命であった（T）支店長の名刺を手に再び私はハイヤーの人となり指定の個所に落ち着いたのであるが何時間経っても否な顔一つせず最後まで歓待してくれた彼の態度に敬服と感謝の頭が下がるのをどうすることもできなかったのである。

折詰が先に戻った花見客
花見膳埃冠つて呑み直し

半休

酒と兵隊

杉谷湖山

門衛の目にも開放した桜

湖山

門衛ならぬ果樹園主で五十年も遠い息の切れそうな昔話しで誠に恐縮ですが、私の責を果したいと思います。

今の東舞鶴がまだ新舞鶴と言っていた軍港の町そこへ海軍の兵隊として取られて三四年たった大正七年、駅の西はずれに桃山と言う桃の果樹園がある。春ともなれば桃の花全山を包み舞鶴一の名所となる。

其の時節になれば園主も全山を開放して花見客と身動きならぬほどのにぎわい、吾等も負けじと上陸番に当ったグループで花見とシャレこみ、先ず酒屋へとび込み（今のような一升瓶はない）徳利か樽、酒屋の主人心得たもので兵隊さん徳利では満足に持って帰ってくれないでしょうと、樽詰にして呉れた。

樽を肩にして程よい所に場所をとり飲む程に喰う程に何せ秋田から西は島根県人で秋田おばこが出る、越中おはら、さては出雲節まで飛び出した。

私は酒には強よかったが唄には弱く、飲んでは注ぎ注いでは飲むばかり。

桜から郷土は梨の花ざかり　湖山

酒に酔っていても皆後かたづけだけはきちんとして、夕暮近かく下山したが樽の持ち手がない。よんどころなく順番と言う事になったが誰が考え出したのか縄切れで樽をゆわえてガラガラ町中を引っぱり高歌高吟。それまではよかったが巡邏にぶつかった（陸軍の憲兵に相当）さあ大変、ちょっとこいから控え室で「ガマ」の油よろしく絞られもうあかんとかん念していた所へ隊長がやってきたが、同県人であったのでまあまあで放免された。

時あたかも西比利亜出兵時、こんな事件がともなったかどうか知らぬが、其の時のグループ全部西比利亜行きを命ぜられて「ハバロフスク」を根拠としてそれこそ軍艦とは名のみ、うすっぺらな玩具のような艦。一発やられたらそれこそお陀仏と言うのに乗せられ黒竜江のいたる所に転戦、特に満州黒河の対岸「ブラゴエシチェンスク」を根城として上流の「スレーチェンスク」支流の「ガーヤ」まで今日はヤラレルか、今日も無事だったかと二年。「ハバロスク」に引き返しここでもまた砲弾の洗礼を受け、夜の歩哨の寒さにはへこたれた。黒竜江を下り尼港に転戦したが半日の後れで尼港に入れず、残念乍ら遠くから戦火に燃ゆる尼港望見するのみ。若し最初から尼港に派遣されていたら惨じめなやられ方をしたろう事を思うと、今だにぞっとする。

今こうして拙文を書き川柳の端しくれをいじっていられるのもよっぽど神仏の加護に依る武運が強よかった事を感謝すると共に、舞鶴の桃山はどうなっている事やら、一度たずねて見たいと思っている。

殿様はいずこお城は花ざかり

失敗談

小林孤呂二

わたし等公務員の場合、職場ぐるみの花見を毎年、同じようにくり返し今日まで来ている。四月になると又同じことをくり返すだろう。

幹事は、そのたびごとにあたらしい趣向を考えられるが結果は全く同じ事に終るのである。そのなかでも満足感を味わったり、途轍もない脱線に迷惑をかけたり、それは数多い、しかしひとつひとつ覚えてもいない。

昭和二十三年の春、町内青年会がはじめての行事として花見の会を催した。今の時世と違って、電話一本で物が集まる時ではなく数人の幹事サンの涙ぐましい努力によって当時は驚くほどの豪勢な酒肴であった。

安来千軒名のでたところ
社日桜に十神山

安来節の唄の文句にもあります社日公園に出かけました。

日曜日の公園は、さすがに桜の見頃も良く団体に家族連れにその人出には驚いた。

しかしそのころは敗戦よりようやく抜けきったばかりで、本当に楽しい様相ではなく、桜と酒に苦しい生活を忘れ去ろうとしか思われない表情が、あちらこちらに見受けられ、そんな雰囲気は、わたし達にも又同じで手持ちの国民酒を茶碗に酌み交わす味もただほろ苦いものでした。

一二杯三杯四杯と唄になり

だんだん呂律（ろれつ）のまわらない唄になり時のすぎるのも忘れて、日頃の集りでは兎角肩ぐるしい論議を交わす者同士が酒に飲まれ、敗戦の痛手にうっ憤を晴らす様相となり、濁声の軍歌に肩を組み坂を転げながらハンチングを無くし洋服は泥だらけにし、数人の幹事サンの涙ぐましい努力を無視した行ないは今思い出してみても相済まない気持で一杯でした。

若さからきた失敗と自省し、その失敗をふ

たたびくり返さないよう自制して来ました。

三等国でもよし桜咲く日本

失敗したくないと願う心は、誰しも同じであると思う。

結果的には失敗したということが明らかになった時は、少くとも、その場にいた人々は不愉快な思いをする、ましてや第三者からとやかく批判がましく事を荒だてされると、幹事サンの苦労してやった事は一瞬にして消え去ってしまうが、そのにがい経験は忘れられるものではない。

幸いわたしも、妻を娶り二男一女の父となった今では、

適量に飲めと心配されてでる

という具合にまで変って来ました。

消えたぼんぼり

林野甦光

戦前呉という町は誠に賑やかでした。

東洋一の大軍港とそして海軍工廠があり、水兵と職工の町として特殊な活気を呈していたのは衆知の所ですが、当時周りの町村合併前は街も狭く灰ケ峰（少し富士に以た灰色の山）を中心に三方山に囲まれた一小都市に過ぎませんでした。夕方水兵さんが上港して来る。そして職工さんが街になだれ込む頃ともなれば街の酒場もあの色街も正に不夜城!!

私達も其のお相伴を得て随分夜の街を飲み回ったものです。勿論当時は今と比較にならない程人心共に生活にゆとりのあった時代ですが、花匂う春ともなれば街のやや上部にある二河公園の千余にのぼる桜木の下は昼夜の別なく賑わいだものです。そうしてぼんぼりの灯に浮かれた酔客は夜を徹して唄い踊り三味や太鼓の音は四辺をこだましていました。

うかれてもうかれないでも花の下
ぼんぼりへ猫もたぬきも出張し

街の料亭は花に客を取られて仲居さんも出張せざるを余儀なくされ、近郷の百姓さんも荷馬車など仕立て、花見にやって来た程当時此の桜は有名でした。

女連れでも瓢箪もって居り
それ花が散るぞと仕事手につかず

花も満開を少し過ぎかかった或夜友達五人と女の子を交えて（女の子は当時流行のカフエーの女給）私も当時は魅力ある一青年で女の子には相当もてていた頃ですが、一同この夜桜見物と出かけた。空は花曇りときて風情そのまま、公園に入るともう一ぱいの人出、適当な場所を選んで陣を引き持参の二本はとうに平らげて後一本追加してちょうど飲みかけた頃、天気が少し怪しくなって来たなと思ったとたん大粒の雨がざあーと降り出した。困りましたね逃げ場がない!! きよろきよろしていると、近所で用意よく天幕を張って飲んでいた十人程の連中を見つけ、早速そこへ飛び込んでちょっと入れてくれるよう頼んだ。ところが大半の者は承知してくれたらしかったが二三の若者が顔を横に振った。人がせっかくいい気分で飲んでいるのにすぐ出ていって呉れという「出ろ、待てよ」といっている内、双方可成り酔が回っているので少しのいい掛りで遂に喧嘩騒ぎになってしまったです。勿論人の場所へ這入ったのはこっちが悪いとは考えられるが、とっさの場合です。入れてくれてもよかろうにと私は勝手な解釈

をしていたのですが、こっちも二人程イキのいいのがいて思わぬ事態になって来ました。

ところが誰が呼んだのか警官が飛んで来た。当時警官はなかなか見識を持っていたから有無をいわせずこっちの二人を曳行現行犯で本署へ連れ込んだ。私達も一緒にいたのだから帰るという訳には行かず、雨にはずぶ濡れ、警察では平あやまり、女の子にはしくじるし全く泣き面に蜂とはこのことで誠に困ったことがありました。

この泣き笑いをかもし出した桜の名所も昭和十七、八年頃東亜戦争の拡大されるに伴い悲憤をあびなければならなくなったというのは入営して来る兵士の、続々と集められる軍需物資の置場に狭い市内ではどうにもならず、この公園に白羽の矢は立てられ、続々建てられる物資倉庫と共に惜げもなく桜の木が軍の命令に依り切り倒されたのです。

街も戦時一色に塗り潰され戦果の緊迫度を加えるにつれ桜など人の心にはもう一辺の夢として消え失せてしまったのです。

終戦後どうやら倉庫も無用となって跡かたもなく取り除けられ公園も順次整備整頓されましたが、あの桜木は遂に現在に至るまで伸びては来なかった。あの桜には当時老いも若きも色々と愉快な楽しいそうしてせつない思い出の数々が秘められていましたが!!

今はもう時代の流れと共に人々の脳裡から去られようとしています。

神馬から

振り落された話

浜畑胡蝶

小生も酒は好きである。斗酒までいかなくとも四合、五合なら軽い、ムードに依っては一升ぐらい時間をかけてペロリとやってのける。

花も毎年グループや家族と見に出かけたものであるが、最近寄る年波につい出不精になってしまって二、三年は御無沙汰という処だ。

然しいくら飲んでもくずれる事がないのが自慢で、したがって失敗談など皆無といって良い。それだけにたった一回の犯した廿何年前の罪を思い出しては苦笑する事がある。

太平洋戦争も愈々たけなわになろうという昭和一八年の春の話。小生も丁度二十一才を迎えた徴兵検査の年で大いに張り切っていた。会社グループの花見は時節柄、皇軍の武運長久祈願を兼ねて京阪沿線やわたの八幡宮へ行く事に決まった。先ず型通りのお詣りを済ませると山ふところにある小料亭で一ぱいということになるのであるが小生も平生飲みつけてない酒をふと口にしてしまったのである

やがて国に召される身を思うと、すすめられるがままに半ばやけくそ気味だった。然しその後がいけない、いつどうして行ったか判らないが気がついていた時、既にあの沢山の石段を上り詰め、先にお祈りをした頂上の八幡さんまで来ていたのであった。桜も丁度見頃とあって沢山の花見客が雑沓していた。初めてのほろ酔いは青年にとって何もかもが楽しく見えたらしい。そして何を考えたのか小屋につながれている神馬をひき出すとアレヨアレヨと騒ぐ群集を尻目にヒラリと飛び乗った。つまりええ格好がしたかったのであろう。

手綱さばきは小さい頃から自信もあるので（出身地が奄美大島）「ハイヨウ」としたたか馬の腹を蹴った。驚いた馬は一瞬棒立ちになったかと思うと前後の足を交互に空を蹴って暴れ出したのである。如何にいささか経験あるとは申せ酔っていてはどうにもならず、不意を喰ってしたたか地上に投げ出された。

幸いにも軽い脳震盪と腰の打撲で済んだが急を聞いて駈けつけたお巡りさんに社務所へ連行され、調書を取られたりさんざんなお叱言を頂戴した。やっと同僚達も来て色々謝まって呉れ、その場は解放させて貰ったが、やはり若さのせいだったのかも知れない。

あれから廿二年を経た昨年の初詣りにふと思い出の場所を訪れる機会を得た。あの頃のように枝もたわわな桜は見る事が出来なかったが、当時のすさんだ人の顔も今ではいとも

平和な顔を持つ初詣の人々であった。また以前より却って立派とも見られる小屋に主らしいやせ馬もつながれていたが恐らく二代目か三代目なのであろう。

そしてその前には一皿十円也の餌が人待つ如くに並べられてあったのが何となく印象的であった。

もうあかん顔に降ってる花吹雪
吹けば散る桜の下で酌み交し
酌ぎ足したビールへ桜散り初め

酔いがまわれば

小林孝正

今から二十五、六年も昔の話です。当時私は、或る地方裁判所の検事局に勤めていました。

春が来れば、花を恋う心は官吏とて同じです。時は春、四月の或る日曜日のことでした。我々検事局々員総勢三十余名、その地の桜の名所に花見を決行することになりました。何様二昔も前のことで、その当時のことも記憶から大分薄れかけましたが、桜は既に満開だったと記憶しています。最初は勤務先の体面も考え、極めて静かに飲んでいました。然し酒が入ると人間何時迄も理性的ではおれません。

酔いが廻るに従って、ぼつぼつ本性を現わすのも出て来ます。そうなると『花だけではおもろうない』と云うのが人間の本音で、誰れが決めるともなく二次会行きが決り、総勢三十余名タクシー六台を連らねて、そこから約十五分位の帰途にある田舎町のバーに繰り込む手筈になりました。そこまでは良かったのです。問題はそれからなのです。帰る際ふと見ると、一升瓶に酒がまだ半分弱も残っているのです。そんなものは見捨ててしまえば良いのですが、そこが酒飲みの賤しさ、それをラッパ飲みにしてしまったのです。処がバーへ着き愈々本腰を据えて騒ごうと云う段になって、急に胸元が苦しくなり、眼を閉じると天井がくるくる廻り始めたのです。

それもその筈、相当酩酊していた上に、冷や酒を一度に五合近くも詰め込みタクシーで揺すったのですから。……そうなると女や酒どころではありません。急いでトイレに行き、胃のものを出すのが精一杯でした。その苦しさは酒を飲まない人にはとうてい解って頂けないでしょう。

四月と云えばバーのかき入れ時です。こんな時のホステスは一現の客へは不人情なもので、食塩水一杯をサービスしてくれたまま、何処へか消えてしまいました。苦しさの余りそう云う彼女等の仕打ちを恨んだものです。然し考えてみるとそれは邪推で、まさか便所の中に人間一人延びているとは気が付かなかったのでありましょう。大便器へ首を突込んだまま、タイルの床に腹這いになり、見られた恰好ではなかったと思います。

然し後で考えてみるとそれがその際身体が要求した、最適の処置だったのかも知れません。そのうち同僚の一人が気付き介抱に来てくれましたが、一装用の背広はだいなしです。然しその際はそれすら気にならない程苦しかったのです。オシッコのこぼれた床に死人同様でした。

家に帰って早速掛りつけの医者を呼びました所『無鉄砲にも程がある』と叱られました。それでも苦笑しながら処置して呉れ、果

心斉橋筋大丸前
電話(271)三三四四番

てはカンフルの世話にまでなったのですから余り自慢になる話ではありません。お蔭でその日は絶安絶食を命ぜられました。私の花にまつわる酒の上の失敗と云えば、後にも先にもそれ位なものです。それからは酒が恐くなり、以後そんな無茶はしません。そのうち歳を取り酒の量も減りました。

今の私を知っている人にこんな話をしても本当にはしてくれないでしょう。それから間もなく、私は家庭の都合で検事局をやめました。そんなことがあって二、三年過ぎた或る日、私はその検事局を訪問してみました。

するとその節世話になったその友は、既に検事に任官し、厳めしい顔で検事室の椅子に座っていました。それから早くも二十三、四年何もかも遠い夢のような気がします。

満開へしょんぼりしてる無一文　孝　正

桜花柳談

中川晃男

〝花よりだんご〟

〝酒なくて何のおのれが桜かな〟

昔から花には飲み食いがつきものでその花も桜。永かった厳しい冬の試練に堪えて柔らかな春の陽射しを浴びられる喜びが酒の勢を借りて大きく息吹くのである。花見の酒とは云うものの桜を賞で乍ら飲むよりもただ「花の下で」と云う手段でおのが憂さを発散させたいのであろう。

花見ずに花見の酒に酔いました

だから酒には酔ったが爛漫の桜はよく見なかったと云う向も少なくはない。そして飲む程に酔う程によろよろと踊り出た差す手引く足は酒の座に一層の興を添える。それが気の合った友人ともなれば二次会三次会へ足が伸びようと云うもの。

飲みすぎへ肩貸す方も千鳥足

とすると酒を飲まぬ子供の方がささやかな折詰に花片をヒラヒラ受け乍ら本当に陽春を楽しんでいるのかも知れない。

すし折を開けば花が散りかかり

島根県内にも桜の名所は数々ござるが先ず松江市城山の松平十八万石千鳥城下の桜、縁結びの神出雲大社外苑の桜等々に忘れる事の出来ないのが木次土堤の両側に続く二粁の大桜並木である。正に花のトンネルとも云うべくアベックには持って来いの散策路であり、近頃は県外からも観光バスを相次いで乗り入れるようになった。ぼんぼりに薄紅く浮き上った夜桜の風情はまた一入。

アベックへ桜の方が頬染める

地元藤井明朗氏の肝いりで木次町では毎年町協賛の観桜川柳句会が催され大阪の正本水客氏もその常連になられた。昭和三十一年から四年間ここに在勤していた私は無理しても毎年出かけてしまうのである。

一昨年の春、尼縁之助氏を旗頭に出雲から大挙十人が乗り込んだが、句会がはねて居残ったほろ酔いの面々は夜桜見物としやれ未だうすら寒い春風を頬に快く受けながら、橋の畔の公園で腰を下ろし何時までも柳談の花を咲かせたのだった。

柳談が手真似でつづく酒の酔

出雲地方も活花は仲々盛んである。同人の野村岬月氏など池の坊のれつきとしたお師匠さんであるが郵便局にお勤めの労組委員とは取合わせが仲々面白い。

花の命ゆがめて華のお師匠さん

花一筋に静かに眺めるより食べたり飲んだりの視覚と味覚ひいては聴覚をも充たす方が一層効果を高めるのであろうか。

然し酒は飲んでもゆめゆめ車を運転してお帰りにはならぬように――。事故でも起こしたらその償いに一生を賭けることにもなりかねない。

車ふえ事故ふえ外科の患者ふえ

春はもう目の前である。花は桜木人は武士と謳われた日本の国花「さくら」パッと咲きパッと散る潔さと、果敢ない花の命を代表する「さくら」

せち辛い世の中にせめて一級酒に口をしめ

しながら枝もこぼれんばかりの桜を心残りなく観賞したいものである。今年はもっといい事があるように祈りつつ——。

生き甲斐のこの花この酒ありてこそ

三人寄れば

杉原愛鳩

酒は親ゆずりで大好きだけれど余り強いほうではない。かりに同窓会あたりで、上戸の番付をこしらえたら、せいぜい十両が幕尻あたりかと思っている。そんな私が、幸か不幸か非常に忙しい職で、殊に春秋の季は甚だしい。しかもピンチヒッターがきかぬとあってここ十年来花見に行っていない。

花の雨どうせ出られぬ職を持ち

お花見は歩いてゆけとバスのスト

下戸風邪をひいてかえった花の雨

そんなひがみ根性からこんな句が生れたとは浅間しい。こんな私に去年は友のMが自慢の染井吉野の一枝を惜しげもなく折って来てくれたものだ。おかげで家の中に居て毎日花見晩酌を楽しむことが出来た。

だしぬけに一升さげてくるも春

私にも一むかし前頃の思い出がある。友のDとTがだしぬけに一升ビンをさげて誘いに来たので三人で郊外の賀茂川畔へ花見に出かけた事があった。

白砂清流土堤には若草がもえ、桜並木があって今満開の花の下には午後の陽を受けて、それぞれにグループが陣取ってお盛んにやっている。

花の下も結構だが私達は遠見の桜もまた佳しと対岸の草原へ坐を占め、おもむろに持参の一升を楽しみながら心ゆくまで花を眺めた。

さしも永い春の陽も西に傾いた頃は一升も無くなり、遠見の桜は益々美しく、このまま帰るのも惜しくなり、もう一升追加と決定し小まめなDが空の一升瓶をさげて町へ走った。

さて二升目が大半なくなった頃、酔眼をこらして向う岸を見れば桜の下にはもう人影もなく、宵やみの迫った満開の桜は、ただ白くボーッと見えるだけ、ええままよと三人は、とうとう全部平げて誰からともなくゴロリところがり其後全く意識不明。

話変って三人の妻君共は、すっかり暮れても宿六が帰って来ないので、もしやと思って子供まで動員して、賀茂川まで来てみたが、只真くらで呼んでも呼んでも返事があればこそ、半ば不安にかられながら探すうちに対岸に火がかすかに見えたものだから、おそるおそる行ってみるとそれは七輪の残火であった。そして三人は気持ちよさそうにひっくりかえっている様が懐中電灯の光の中にあったとさ。

そこで叩きおこされて、どうやって家へ帰ったのかは残念ながら全然おぼえがなかったが、後からきいたところでは、DとTは妻君の肩を借りてやっと歩けたそうだが、私は七輪などを積んで来た手車を押して帰ると云って聞かず、とうとう手車にしがみついて帰ったそうである。DとTの妻君から責任感があると、非常にほめられたことを今でも時々思い出す。

追憶のときれとぎれに遠くなり

近作柳樽

西尾栞選

大阪市　小東琴女

せつかくのチャンスに理性顔を出し
欠伸かみ殺しころし祝辞きく
戸を叩く夜風帰えらぬ娘を案じ
鼻の差を写真判定でくつがえし
よう辞めんくせに不満ばかり言う
スチュアデスが可愛いそうやと遭難機
正札のゼロ一と桁を読み違え
童話劇乙姫さんはうちの子や

八幡浜市　平田砂生

丁重な電話机へ足をおき
とろけそう子のない妻と猫の私語
金のしわ伸ばす老婆の目の配り
三色にぬり分け妻の顔出来る
振り返る子を引いて出る玩具店
落語部で活躍中と子の賀状

大阪市　吾郷玲人

身を隠す女の宿に降る氷雨
求人も選考求職者も選考
名目をかえて役所は金を出し
順調に日本列島春となり
蝶も酔うパンジーアネモネチューリップ
泣き寝入りするのではない邪魔くさし

松江市　町中村魚

嫁ケ島宍道湖のあじのアクセント
神域の史話老杉と落椿
さざ波が平和に夕映え湖都浅春
あつさりと農民病と医師決める
夕映えに照れくさそうな天守閣
農民病鯛や鰻を食いなはれ

岡山県　月原和秋

始球式見当違いな方へ投げ

反応を試す愚問も用意する
イサイフミ何はともあれ金が要る
役割を決めても牛耳る顔がおり
週刊紙微に入り細に入つたデマ
小包みをじれつたいほど結んどり

倉敷市　水粉千翁

デパートの見合いでアドバルーンをほめ
宝石のささやき殺されそうになり
励ましをこぼして酌いだ祝酒
箱庭の広さで足りる四季の花
スタートを出雲の神に見てもらい
憤懣を蹴られて石の孤を描き

笠岡市　木山要次

理容師の不満床屋という呼び名
強く押すブザー自信のあるお客
いつわりを無口でかくす靴をはく
神様を信じたくなる昨日今日
担送車妻は覚悟の目を閉じる

北九州市　三上春雄

倍増にうつかりのつた呱々の声
大臣になるとは言わぬランドセル
人間の先祖は猿と知るエレキ
知る人ぞ知るとは左遷の発車ベル

掘炬燵聞いていけない事をきき

岡山県　日賀芳月

愛に恋涙にキツス歌謡曲
私生活とは我々の事でなし
七十をなげき年金うれしがり
ここだけの話へツンボが来て座り
日々多忙ふと洛北の字にひかれ

島根県　堀江俊夫

先生の足音みんな席につき
夜警する僕らに犬もついてくる
給食のパンがとどいた風邪の床
かあちやんの白髪みつけた肩たたき
さい中のテレビへお使いいいつかり

仙台市　平野光道

春うらら喋つててバスにおき去られ
涙腺の故障と嬉しい日も涙
灯をみんなともして鍵つ子母を待ち
消防予算ビルの高さに追いつけず
かわるがわる老妻とあくび彼岸春

大阪市　古川集一

金持つてからの礼儀が増たらしい
おしやべりのくせにおしやべり軽蔑し
体験談主観に溺れたのは知らず

崩雪音春の扉を開ける音
手術の傷かばい懐炉を背に負う　奈良市　村上春己

時計屋の時計が二分おくれてる
ストーブへ今朝の話題をもってくる
煉炭で母が自慢の塩昆布
半分は恐さで鹿に餌をやり
せんべいを買うてる財布鹿のぞき　広島市　上代美文

党籍を離れただけでケリがつき
空白の日記来年度へまわし
定年制明治そろそろ姿消し
野次馬の眼にも頼もし消防車
特価品手垢がついて売れ残り　羽曳野市　谷垣史好

絶食の日に御馳走の見舞来る
鈴の音が春を運んでくる峠
心ときめく四十の俺としたことが
そこまでの散歩へ口紅引いてくる
にぎり返してくる手のいじらしさ　尼崎市　海士天樹

大砲の錆忠魂もなげくまい
惚れている方が別れへふり返る
正座して火鉢へ遠い手をかざす
とり戻す愛あたためる周遊券
石拾う津軽訛りに教えられ　和歌山県　山本泣笑

恋猫へ石投げつけている孤独
蝶番のビスがゆるんで春となり
福耳を持つて貧乏つきまとい
郵便料値上げに怒る筆不精
貨幣価値石まで値段つく時代　鳥取市　藤本礎山

落日を釣るように糸投げかける
灯を消せば女　女の匂いする
神様のような心で出世せず
エス様を語る娘で独りぼち　大阪市　栗田くり坊

軍鶏の声野武士の勝閧に似る
底辺の生活が生んだ人間味
ホステスの恋収入が減りはじめ
百人一首歌人気質の声となる　鳥取市　近藤秋星

胃下垂で済んでよかつたレントゲン
野良犬の幸　野良犬が知つている
痔をやんで痔の広告が目につきぬ
最大の敵は自分の中に棲み　島根県　堀江芳子

嘘でない瞳きれいにみつめてる

あきらめていた冷え性へ帯祝
片目だるま　わたしにウインク投げている
酔うてよし寝てよしその間苦を忘れ

竜野市　森　下　峰　子

一喜一憂こうまでほんろうされて日々
ついと立つしぐさ悲しさ隠し得ず
熱風呂をわかして妻の勝気過ぎ
どっちでもよかったとさみしい事を云う

大阪市　今　井　章　子

この傷の深かりしこと砂に寝て
落葉いま風におされてひとり言
オーバーの衿立て春のモード展
隅つこにころんだ鉢植えにも新芽

石川県　同　村　虹　要

湯の街へ来て老夫婦手をつなぎ
アベックが来てブランコを占領し
アベックに振り返えられる待ち呆け
人形をおんぶしたまま寝てしまい

大阪市　佐　藤　勝　利

筆をもつ手がふるえて字も踊り
立てた計元旦早や破り
これは宇治あれは静岡お茶の通
身の危険返りもみない記者根性

布施市　坂　東　若　芽

失恋で替る職場と親知らず
素人がみても吾が手の筋多難
捨て犬を獣医に診せた子叱られず
スモッグを吹く春風は御災難

出雲市　竹　内　李　朋

年賀状テレビは春の海を弾き
アパートの窓から送る投げキッス
うしろから傘差かけて縫る恋
テレビ見るうしろで白毛抜いてくれ

出雲市　森　山　健　太　郎

作るのを見ながら食べさすから流行り
その割に本読んでない貸本屋
おしかったねの審査員親しまれ
妹の方に恋人先に出来

竹原市　三　宅　不　朽

石橋の裏までたたいた筈の印
無器用な親切どうりに曲る釘
こんにやくの味とは別に美容食
人のよい集金昼寝と知って去に

大阪市　西　本　保　夫

マンションの硝子が割れて誰が住む
ほめてくれ出世とやかく言わぬ妻
先に行く主人明治の夫婦連れ
乗車駅酔うて戻った環状線

大和郡山市　中内孚彦

成人式嘱望されているのは来てず
ひたひたと追つて来る人もなき月夜
いわし雲化学繊維の線のよう
大教授知らぬと言える権威持ち

高槻市　山田スミ子

物置を上手に階段下へ造り
コンクリートの割れ目で春の草が伸び
かきめしの末つ子かきだけ先に食べ
遠慮せぬ朝陽へアパートの朝が明け

大阪市　豊河好永

ことりとも言わず会議室静か
自分しか頼れぬものはないと知り
がまん会のよう一匹も釣れぬまま
十人十色四十人を持て余し

米子市　八木千代

縁談をまとめ保険を予約させ
お隣りの前まで掃いてうまいお茶
強引に頼まれ苦笑で引き受ける

大阪市　和田痴亭

玩具みなバラス五才の児の科学
釘一つ打てぬくせしてタイラント
膝小僧かくせぬ筈をかくす真似

大阪市　西川誓二

手術待つ付添人の声ひくし
頬ずりもしたくなり気の我が机
譲られた席心もヒーターの暖かし

大阪市　堀内暁風

建て増しも出来て縁談まとまらず
建て増しの予定それまで葱をうえ
恩給の又小刻に出す貯金

米子市　林瑞枝

縁談が娘の卒業待つて居り
老いてなお少女の夢を捨て切れず
大都市の刺激に酔うた旅疲れ

愛媛県　関本柳剛

良心の逃げ場の靴を揃えられ
艶然とそっぽむいてるから憎い
だるま今日歩いて見たい嬉しい日

松山市　河本南牛史

死にたがる恋愛仲人引き受ける
此処からはスリッパ履けと建てひろげ
ポケットに京阪神でのおつり銭

竹原市　小島和幸

消印と住所が違うラブレター
ここで肚たてたら僕が負けそうな
晩婚のそれも恋愛ですと言う

大阪市　長谷健生

貧乏も幸福ですとまだ三つ月

新妻が叱ってくれる程になり
明治　大正　昭和テンポの違う踊りよう
長崎市　甲斐　笊柳

儲かったソロバン珠が滑りすぎ
ヒロインはまだ殺すなとファンレター
なんだもう消防来たのかつまんない
島根県　石田　清泉

灰皿へためて思索の日が続き
心配せんといて呑ん気な嫁きおくれ
早咲きの梅へふんわりにわか雪
渡辺　かずこ

お人良し思わずムードにひきこまれ
内職の母を残して嫁入し
遠乗りに母はきちんと座って居
松原市　守屋　万竿

見送りに会釈する顔早や部長
見送りのバンザイ悲し都落ち
御亭主も教育ママはちと苦手
ホノルル　加川　カロ女

その野心まず盆栽をほめておき
目に物を見せてそれから疎まれる
山海の珍味あと腹もめそうな
尼崎市　吉川　イツ子

給食のメニューも課長目をとおし
栄転の駅で別れるマダムの手
煎薬の匂いを飲んでいる産後
倉敷市　行吉　照路

会議室ゆらぐ煙りもねむたそう
周旋屋未来のことに熱をいれ
眠ってるときだけ支配からのがれ
大阪市　今井　岳太

万金丹絣の娘に背負れて
ままごとの母の仕草に似てたのし
路次多く明治生れのとぎや――とぎ
鳥取県　鈴木　村諷子

前に来てみれば案外おばあさん
鶏が裸にされて売ってあり
あてられて出雲の旅のひとりもの
名古屋市　花東　千久良

買い叩くつもりの客とみて買わせ
醜男の自供刑事にいたわられ
島根県　堀江　正朗

新婚へバツクミラーが気にかかり
酔いざめの水は小言と共に来る
鳥取市　藤本　佳女

ネクタイの似わぬ父は浜育ち
サングラス似合う娘で落ちつかず

岡山県　瀬戸山文平

保有米老父はせめて俵にし
五十肩いたわるようにお灸すえ

羽曳野市　杉本白扇

病室も女のそれはすがすがし
なじめない町でめでたし雑煮たく

羽曳野市　江城功雄

女の嘘聞く暖房の外は雪
倖は憩う家あり足伸ばす

玉島市　井上旭峰

新郎の酒癖ぬきにした祝辞
投書箱字くせをかくす左り書

大阪市　森本良夫

下戸もいる酒蔵めぐりのバスの中
研修所にも柳友がいて楽し

米子市　林登良代

雪山を守る地蔵も雪の中
庭の松行儀の悪い方をほめ

寝屋川市　福富隆子

半額券長蛇の列の市場籠
帰らぬ子寝返り寝返りしての朝

宮崎市　野口卯之助

雑音の都会に住んでいて孤独
シャム猫のような女にして典雅

河内長野市　森本黒天子

人妻の魅力が我を追いかける
人妻になつた動機が我をせめ

八尾市　宮西弥生

間借りする暮しへ釘のうちどころ
男見る瞼も燃えて適令期

島根県　岡崎祥月

八七〇米の高さ高野の町栄え
何もかも忘れ夫婦で汽車の旅

七尾市　松高秀峰

雪ダルマオバケのQちやん型になり
指切つて日曜大工出来上り

神戸市　吉田隆史

三味措いてくどい愚痴言う姉芸者
今着いて降りているのに発車ベル

堺市　斎藤亜也

折り込みもみみつちくなつた不況
ベストセラー家康いまだ衰えず

青森県　岩淵一星

へそ繰りは赤字を埋めて見つけられ
子を育て上げて中風が近くなり

尼崎市　岡本昭三

丙午地球の隅でまだ言われ
補助椅子で幹事寝息をもらすバス

愛媛県　瞪　本　満　子

あきらめることになれきり日々平和
ネグリジエに早くも挑む目の光

布施市　竹　下　博

祖母孫の電車ごっこをもて余し
肺癌を注意する医者煙草のみ

羽咋市　三　宅　ろ　亭

卒業式手を焼いたのが礼にくる
早春を舗道で短靴はいて知り

今治市　小　笠　原　雄　堂

内風呂のママの脊にもサロンパス
きれいな手それにすられたあわてよう

小松市　田　島　健　二

別室に芸者待たせてする会議
友情もかけ出し時代のことでした

倉敷市　水　谷　谷　水

追従ももうしなくなり庶務の隅
賽銭をほるにも妓なまめいて

福岡県　大　平　胡　水

遊びたさ教育ママの逆効果
リユーマチの薬待ち待ち半世紀

京都府　菊　沢　破　天

恋愛をわれにかえってゆるす母
超特急名前替えたい日が続き

笠岡市　谷　本　鈍　愚　坊

石ブーム姿を消した道しるべ
ワサビ田にひそとせせらぐ湧清水

奈良県　木　村　よ　し　を

あの人ら何する人やパチンコ屋
居酒屋で養子はあげる大気焔

福島県　佐　々　木　ゆ　か　し

不景気の話題新年のお年玉
母娘して入ったつもりで書く願書

大阪市　白　井　孝　子

添う人のなく明け方の肌の冷え
プラモデル出来た頃には子は眠り

高知県　山　川　勝　子

老人に葬棧敷の平和郷
嘘三分まぜて仲人よくまとめ

茨木市　高　木　繁　太　郎

新聞の片仮名読むに辞書片手
もてすぎる二代目周囲の気をもませ

大阪市　桝　本　蕗　児

トントンとお銚子階段上り下り
骨董屋箱に時代の色をつけ

大阪市　多　々　納　賢　三

大阪府　新　田　忠　雄

秀句鑑賞

―前月号から―

後藤梅志

わが姓は一代かぎりそれもよし

（一三夫）

一連の、結婚讃歌とおぼしきものの一句だが。わが娘の結婚という事態をめぐって、如何に悦び、如何に悲しむか、この句がよくそれを明白にしている。

わが姓が、一代限りと覚悟する。そのこと自体は、悲壮かぎりもないが。これが目出たいのである。なんと人生とは、悲痛なものを味あわせるものか。

いやも、応もない。男の子を生んでおかなければ、養子をするか。婿さんのおとなしいのを探すしかない。ぐずぐずしておれば、家名は中断するのだ。新戸籍法の矛盾を衝いて、悲壮感を呼び起す句だ。

作者は、男らしく、思い切りよく、後者のみちをえらぶらしい。

作者には、どこか芸術家ハダなところがある。

（八十の春を迎えて）

八十の坂けわしくてけわしくて

（千　容）

人生は、三十にして起ち。四十にして惑わず。六十にして天命を識る。いまはすこしずれて来ている。それにしても八十という歳は、幾艱難を経て来た、高嶺の雪をみる感じがする。

「けわしくてけわしくて」は、人生の坂を意味するもの。あたかも山でいえば、九合目の爪先きあがりに相当するだろう。

句というものは、言外の意味を語っているものをもって佳しとする。この句は、古淡の味掬すべきものがある。

それにしても、川柳というものはいいものだ。たえず脳の洗じょうをしてくれる。肉体はおとろえて、足許はあぶなくなっていても、あたまの中さえしっかりしておれば、八〇歳はおろか、九〇歳も目の前のような気がする。

桃割に節分の豆はねかえり

（喜　由）

なんとたのしい句だろう。関西には、節分になると前の晩から、「お化け」といって、むかしの髪かたち、昔のままの衣裳を着て、街なかを練りあるく風習がある。おばけそのまま、桃割れに結ってるのが女給さんだったり、女学生がそれになったりする。成田の不動さんなどに行くと、昔の服装のまま、押しあい、へしあいしているが、その桃割れの髪にも、節分の豆がパラパラと降ってくる。

節分は、何もかも忘れて、早春をハチキラセル。新年の屠蘇の香とは、まったく別な味だ。昔の人の、思いつきの行事に、従っていて、それでたのしい。これが要するに、日本人の姿だろう。

この句は、ただ面白いというだけではなく、滋味があるのだ。

「桃割と節分の豆」。これがとり合わせの妙で。芭蕉が作句の例に引いた「たて臼にさつま薯」。すなわち、玄米が臼の中に這いっていては、平凡な、農家の庭先きにしかならない。のと同様に、「賽銭」が当ったのでは、一向おもしろくない。

北浜にくすぼったまま男老け

（形　水）

北浜には、「ゲン場師」と称する、立ン棒がいる。寄り付と、大引けだけで勝負をする。あじけない連中だ。運がよければ、米代はおろかダイヤの指輪も、買いかねないが。負け

つづけると、スッテンテン、昼飯代もままにならぬ連中。場内の相場が荒れてくると、風（かざ）吹きがらすのように、道ばたを右往左往する。

北浜は、なんといっても、金がモノを云うのである。あまりたいして目が出ないまま、利（と）ったり、とられたり、いつのまにか、四十、五十の年齢をつみ重ねる。

うまいものを食っただけが、得と観念する。こんなことを「くすぼったまま」と表現したのだろうが、環境をあますところなく詠みこんで、秀句。

「男老け」も、最後を締めくくって、古句にみるような、いい句になっている。惻惻として哀感が迫るではないか。

財布ぶっちゃけて負けさす銭を読み

（文　秋）

「財布をぶちまけて」値を値切るのは、荒らっぽい商売だ。この頃は、諸事物価高だから、河内あたりの「しやも買い」ですら、千円札、五千円札。丼池筋などでは、一と握りの金がみな大紙幣で扱われるから、この句は、うら町の小商人。それも、其の日稼ぎの人達らしいが、「財布ぶっちゃけて」と、大阪の方言をもって来たのが、成功している。

あたかも、のっぴきいわせぬ、この商人の意気込みを目に見るように、そして、なにがしかのユーモア味をまぜて、鑑賞することができた。

作句に、よくよく熱心でなければ、こんな句にはならないことを、染みじみ想うのである。

財布のなかの、よれよれの札にまじった、小銭が、バラバラと戸板の上におちる。その音までが感じられるのは、欲目だろうか。

いつわらぬ鏡へ疲れはてた顔

（小　石）

いい鏡ほど、はっきり明暗を見せてくれる。外出の時の、化粧した顔はうつくしく映り。仕事をおえた時は、その反対に、かぎりなく憔悴して見える。われにもなく顔をおおいたくなるような、瞬間さえある。

自分の顔に、自信のある人でも、どこへ出してもはずかしくない顔。というものは、めったにないであろう。この句が、よくそれを語っている。

ところで、顔は、その人の鏡ともいうべきであって。その人の心の奥底にあるものは、すべて、そのまま鏡にうつるのである。

この句は正直だ。すこしも粉飾しない。それでいて、読む人に一つの示唆を与えるのは真実をそのままに告げているからであろう。

カタログのように咲いてはくれぬ花

（丁　路）

朝顔の種袋を買えば、どの袋にも、大輪の花が描いてある。印刷が見事だから、その通りの花が咲くのかと思って、買ってみると、いたって貧弱な花しか咲かない。だまされたと、いささか腹が立つが、結局、植木屋を信用するしかないものだ。

カタログを取りよせる熱心な人は、尚更であろう。しかし、草花というものは、微妙なもので。陽当りがちがい、手入れがちがえば、同じ物は咲かないのが道理だ。

この句は、ものには根気がいる。丹精がいる。ということを、暗に訓えている。

手土産のいる程敷居高くなり

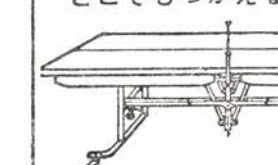
（多　幸）

若い人の句だ。誰にも、世話になった人、というものはある。時々は、顔を見せねばならぬ先輩に、ご無沙汰は禁物だが。「今日は雨が降るから」とか、「サン髪をしていないから」とか、ご無沙汰をする。遂に、敷居が

新機構　Delica

デリカ卓球台

簡単にたためて
手軽るにうごかせ
どこでもつかえる



福井工業株式会社

高くなったという訳だが、ほほえましい状景だ。

「手土産のいるほど」は、垢ぬけのした作句である。

老いし身のもう藪医でも事が足り

（遠　二）

無欲であり、恬淡であることは、ひとしく、長命に結びつくものであるが。だいじなからだを預けるお医者さんも、藪医でいいというのは、徹底している。

達観した人には、医者の方が、患者から教えてもらうことすらあるものだ。

専門医は、ときどき診（み）そこないをやることを、藪医は、商売柄知っている。コトなどを思い合わせて、同感を禁じ得ない句だ。

ええおなごじゃったと坊主独り言

（玲　人）

色欲、煩悩をたち切った坊さんも、目だけは肥えているとみえ、とんでもない、独り言を云ったものである。

この坊さんは住職か。それとも、納所坊主か。いずれは人出入りの多いお寺だろう。

作者はなかなか、人がわるく、頭のまるい坊さんをとうとうハダカにしてしまった。

この句は、想像句にしてもおもしろく。法衣を纏った僧侶も、やはり、人間であることを衝いて、てきびしい。美女は、人妻だったかもしれないのだ。

「ええおなごじゃった」が、絶妙である。

どうやらこの作者も、油が乗ってきたようだ。

雪となり捨てた仔犬を探して来

（酔　夢）

仔犬を、原っパへ捨てて来たが、雪が降ってきた。大雪になりそうなので、可愛想でもあり、傘をさして探しに出る。なかなか見つからなかったが、とうとう探し当てて、ふところへ入れてかえって来た。

こんな叙景が、みごと出ている。仔犬を捨ててくるのも、拾ってくるのも、同一人なのが、ほほえましいのである。人情はかくあるものか。佳吟。

足を組む男意外に背が低し

（峰　子）

元来、電車やバスの中で、足を組むのは、背が高く、下半身が長いからだが。

この人は、みれば小男なのに、足を組んでいる。

虚勢を張ったようで可笑しかったから、句になったのである。

ただ、それだけだが、句には、飾らない面白さがある。「意外に背が低し」はすこぶるタン的だ。

焼香もサッと済ませて記者らしく

（谷　水）

これは、取材に来た新聞記者らしいが、記者をしている人は、動作も機敏で、服装もあかぬけしている。

悲しみの場に処しても、非礼に失せず、要務は、キチン、キチンと処理して行く、若い記者の男らしさが、この句にはスケッチされている。

記者になり切るには、或る場合に、非情の人と目されることも、あり得るのだが。記者も人の子であり、親であることに、かわりはないのだ。

サッソウとした、新聞記者を。この句はきわどくとらえた。

×　　×

巨匠が第一詩集「火花」第二詩集「鼓笛隊」につづいて矢つぎ早やに放つ第三詩集！

聴け警世の鐘の声を！

詩集

「ピカソさん」

藤森成吉著

定価三八〇円・二二七頁

発行所　株式会社　評論出版社

大阪本社　大阪市南区順慶町二の二〇（順慶ビル）

路郎忌川柳大会は41年7月10日(日)　午前10時開会　午後6時閉会

第1部・一周年祭典（午前10時）
第2部・川柳大会（正午）
第3部・懇親宴　午後3時（詳細は次号で発表）

川柳塔社常任理事会

第二回常任理事会が三月四日午後六時から本社楼上で開かれた。

①現況報告—毎月購読者がふえ、同人諸氏のご努力がここに結実していく。

②ハワイ・ウイロー社の選評と選句—〃近作柳樽〃の選者にご依頼することになり、三、四月分は西尾栞選者。五、六月号は北川春巣選者。

③路郎忌川柳大会—まず会場の第一候補は、天王寺美術館の東側にある眺望絶佳の「慶沢園」（けいたくえん）という元住友別邸で、ここは地下鉄、環状線、市電、市バス等の乗り物に便利な地点である。

兼題の選者や題がほとんど決定したが、未交渉の方もあるので、詳細はすべて次号で発表。

なお、第一部「一周年祭典」は清水白柳編集長を責任者に、好郎、古方、圭井堂、静馬、摩天郎、いわを諸氏が補佐することになった。

第二部「川柳大会」は若本多久志副理事長を主軸に、小松園、栞、いさむ、水客、薫風、与呂志、柳宏子、文秋、清人、庸佑、八郎、操子、阿茶、一栄諸氏。

第三部「懇親宴」は松江梅里副理事長を中心に、形水、恒明、竹荘、柳志、白溪子諸氏があたり、大会の写真は舟遊氏、記事は一三夫氏とそれぞれのポジションがきまる。

出席—白柳、庸佑、好郎、古方、静馬、圭井堂、薫風、恒明、生々庵、梅里、栞、文秋、小松園、多久志、一三夫諸氏。閉会8時30分。

新同人紹介

★大阪市東住吉区桑津町五丁目一六八番地
本庄金三—白柳・梅里推薦

★布哇ホノルル市三八三三・マリポサ六八九一六
田中万里歩—快夢起・多久志推薦

★ハワイ州オアフ島エワ郵函七四六
満生拝山—快夢起・多久志推薦

★布哇オアフ島カコオ町マカヒオ街四五二〇六
若本あき坊—快夢起・多久志推薦

★布哇ホノルル市ココヘッド街
池田泉水—快夢起・多久志推薦

★布哇ホノルル市十番街一一三八
磯島三石—快夢起・多久志推薦

★宝塚市山本中垣内三〇ノ一
小畠無聖—無鬼・生々庵推薦

（川柳戦国志・一）

太田道灌

富士野鞍馬

江戸城

道灌は、源三位頼政十六代の後胤、太田備中守道真の子で、はじめ資長といい、後持資と改め、剃髪して道灌と称した。父と共に品川に居たが、江の島弁天へ参籠の帰りの舟へ、コノシロという魚が躍り入った。コノシロは九城に通じ、これを吉祥として、江戸をはじめ九カ所へ築城したといわれている。また霊夢に感じて、城地を定めたともいわれている。

そのころまだ芦荻生い茂る、豊島郡江戸の千代田、宝田、祝という所を城地と定め、康正二年（一四五五）築城の工を起し、長禄元年（一四五七）江戸城ができたのである。その時持資は二十五才であった。それから江戸が関東の要地となったのである。

もともと道灌は、扇が谷上杉修理大夫定正の臣であったが、ある人の讒によって、文明十八年（一四八六）定正のために、糠屋の館で入浴中謀殺された。時に五十五才であった。

その後江戸城は、上杉定正、朝良、朝興が在城したが、大永四年（一五二四）上杉朝興は小田原の北条氏綱に亡ぼされた。それからは氏康、氏政、氏直と北条四代の持城であったが、天正十八年（一五九〇）氏直は豊臣秀吉に亡ぼされ、北条氏の領地関八州は徳川家康の得るところとなり、その居城を江戸と定め、八月一日に入国して、城櫓、城郭を大修築し、市区を拓いて、関東繁華の中心は、小田原から江戸へ移ったのである。その江戸の草分けは道灌であるから、川柳は

江戸紫の下染は桔梗なり　（八一3）

むらさきのむらをうばひし紺桔梗（拾四）

道灌の頃も桔梗は丸の内　（一四四4）

と詠んでいる。道灌の紋は桔梗であった。

山吹の里

文明年中（一四六九—八六）道灌は狩に出て、にわか雨にあい、一農家に立寄って、雨具を貸してくれといったが、その家の娘が山吹の花を折ってさし出した。それは古歌「後拾遺集」にある中務卿兼明親王の

七重八重花はさけども山吹の
みのひとつだになきぞかなしき

という、小倉に住むころ簑を借りに来た人への歌になぞらえて、「簑はありません」という無言の表示であった。

それを道灌は解し得ず、帰城してから近習の士にその意味をきいて悟り、それから歌道を勉強したという伝説がある。その場所は不明であるが、後に「山吹の里」という名所が、旧高田馬場の北下戸塚に在るようになり、その碑が建てられてある。この伝説に興味をもち多くの川柳が詠まれている。

山吹の花だがなぜと太田いひ　（二二17）

山吹を桔梗へ出した俄雨　（三三10）

ぬれた桔梗へ山吹の花を出し　（二七8）

山吹を桔梗へ出して名をふらせ（一三八12）

家紋の桔梗で道灌を表わしている。

賤心あって山吹出してみせ　（四四29）

山吹はどの道かさぬ色と見へ　（四四28）

だアまって賤の女花を出してみせ　（一一七34）

山吹とかけてなんだかあてなんし（六五16）

山吹のいわれを話す雨やどり　（八七9）

えい娘だがおふしだと太田いい　（安五義3）

実のならぬ花で実のある返事也（四五17）

山吹よりも手廻しは梨の花　（六四16）

やさしさは簑ない花を折て出し（三七7）

簑一つ有るとやさしい名はたて（二八34）

山吹を出され褌までぬらし　（八一36）

道灌じろりこの女唖かしら　（一六三19）
道灌も金を貸せだと初手思ひ　（八九7）
山吹の花できいろい恥をかき（一〇一23）
どふ考へても山吹初手解せず　（二九9）
とその山吹の意味がわからなかったことをおもしろく川柳にしている。
さて山吹が気になると御帰館後（一三八29）
ずぶ濡れになって帰ると歌書を買ひ　（一七3）
恥ずべし恥ずべしと道灌歌書を買ひ　（一六一5）
後拾遺の古歌と道灌後にしり　（八三27）
あとでそれを知ったことも詠まれている。
山吹はぬれさせ松はぬれさせず（八二2）
和漢の雨やどり持資と始皇　（筥二27）
と、秦の始皇帝が松の木に雨やどりした故事と並べても詠まれてる。どうせこの伝説は作り話であろうと
道灌の山吹種のない話　（八二27）
とも詠まれている。
この道灌が狩をしたのは、金沢山で、雨にあったのは六浦の辺であるという説もある。そしてまた、山吹を見せた娘は、応仁の乱の落武者が早稲田辺に住んでいて、その姉娘の欠皿というので、道灌は感激のあまり愛妾にしたという話もあり、その欠皿の墓が、大久保余丁町西向天神にあるという（春城随筆）

二　道の勇士

雨の山吹歌道には善知識　（一三三27）
雨やどりまではぶこつな男なり（天元礼1）
雨やどりから両道な武士となり（筥二29）
長禄元年（一四五七）四月八日、江戸城を完成させた持資（道灌）は、書斎の静勝庵で
わが庵は松原つづき海近く
富士の高嶺を軒端にぞみる
と詠んだと伝えられているところから考えると、道灌は歌道に暗かったというのではなく、山吹の古歌の洒落がわからなかったということであったのであろう。
後、持資は下総へ軍を進めた時、千鳥の声が遠くきこえたので、
遠くなり近くなるみの浜千鳥
なく音に潮のみちひをぞしる
という古歌を思い出して、潮が干たことを知ったといわれている。（雨夜の灯火）それも川柳は、
山吹は恥辱ほまれは浜千鳥　（一五四25）
と詠んでいる。
また、管領細川勝元が、持資に韓昌黎の「短慮不成功」の語意をたがねた時、直ちに、
いそがずば濡れまじものを旅人の
あとより晴るる野路の村雨
と詠んで答えたという。これで道灌は歌道にも通渉していたことがわかるのである。
山吹の後はぬれまじものとよみ（三八5）
山吹にこりてぬれざらまじとよみ（四二22）
山吹の後は二道の勇士也　（七八12）
とこれも川柳に作られ、「慕景集」と題した道灌和歌集も残されてある。赤羽静勝寺には道灌の木像があり、東京都庁前には狩姿の銅像が建てられている。
日暮里に「道灌山」というのがあり、「江戸砂子」には「太田道灌出城の跡といふ。いかさま所々に小土手ありて城池のかたちのこれり。此山よりも眺望又よし」とあり、
道灌がのぼらぬ前はただの山（一〇九28）
是も縁道灌山の俄雨　（一〇九30）
と詠まれ、また由井正雪がここで一味を集めて審議をしたので
あさっての晩と道灌山へ寄り　（六四11）
という句もある。

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社　大阪市北区宗是町1

鍵っ子

早川清生　選

鍵っ子は硝子へ似顔を書いて消し　隆子
鍵っ子の影が砂場へ長く伸び　弘道
先ずおやつのぞき鍵っ子ドアをしめ　万竿
金のいる遊び鍵っ子から習い　宗太郎
次の子もまた鍵っ子にして勤め　幽谷
塾そろばん忙しい鍵っ子のスケジュール　保夫
うれしさを鍵っ子旗日の旗を出し　笊柳
鍵っ子で育ち入試を軽くパス　魚山
集金へ鍵っ子小遣いたて替える　奇童
鍵っ子の母大学の夢をもち　雄声
鍵っ子のオモチャにされている仔猫　七面山
鍵っ子が宿題ひろげたまま寝入り　要次
鍵っ子の異状発達したセンス　十九平
パン食の腹に鍵っ子慣れて生き　たつみ
鍵っ子銭を手に豆腐屋のラッパ待ち　光道
鍵っ子へ昼はひっそりして団地　卯之助
鍵っ子にしたくないわネと新夫婦　鶴丸
参観日鍵っ子の母の顔も見え　佳女
いつとなく鍵っ子疑問を抱きはじめ　千代
鍵っ子へ電気ごたつも寒すぎる　清泉
鍵っ子の鼻の跡あるガラス窓　白扇
鍵っ子を解消させて手内職　芳子
かぎっ子の釦ひとりでつけている　愛鳩
教員の子も鍵っ子と手を上げる　章雅
鍵っ子へ命令してる小黒板　隆子
来客へ鍵っ子しっかり物を言い　瑞枝
やっと電化した頃鍵っ子そっぽ向き　芳子
鍵っ子のタコタコあがれちぎれ雲　笊柳
鍵っ子もうどんの好きな子に育ち　魚山
鍵っ子のノドを冷たい茶がとおり　文平
子つばめの口鍵っ子はただ見つめ　砂生
鍵っ子が虫歯の痛さもて余し　恵二朗
陽に遠い部屋で鍵っ子紙を切り　不水
鍵っ子にしてまで学資貯めており　正朗
鍵っ子が音読している置手紙　恵二朗
ガスの栓締めて鍵っ子遊びに出　どんたく
戸を押せばあいて鍵っ子びっくり　庸佑
鍵っ子の不満内から鍵をかけ　代仕男
鍵っ子に押し売りあっさり断わられ　万竿
鳩日記かいて鍵っ子待っている　古方
鍵っ子が街で見て来たこわい顔　文平
着ぶくれて居ても鍵っ子寒い冬　明子
鍵っ子が鍵の置き場所いつも変え　瑞枝
砂山の先を鍵っ子とんがらせ　甦光
鍵っ子の下デモがゆき犬がゆき　軸天

佳

前職

山上千太郎　選

前職がどうのこうのとうるさすぎ　庸佑
前職にふれず失対の群にいる　照路
前職は誰も知らない釜ケ崎　藤原秋月
ドヤ街に前職訊けば笑う人　光郎
税吏してたお蔭げ抜け道知っており　正朗
前職が思わぬところで役に立ち　瑞枝
保母だった人もわが子へ困じ果て　磯山
前職のお蔭げで就職すぐ決まり　井蛙
元知事と云うを顧問にまつりあげ　雄声
外交員前の職場へ顔を出し　代仕男
前職で稼ぐ非番を羨まれ　静水
前職の顔が飲み屋へもうきかず　愛鳩
前職の顔がきくのも二三年　弘朗
前職を忘れて今日の職に生き　季賛
底辺に生きて前職にはふれず　弘道
前職に触れず黙々老夜警　恵二朗

前職はどうやらデカという目付き　七面山
庶務課長だった守衛が水を撒き　幽谷
前職の椅子が頭にこびりつき　文平
前職を問わず語りの屋台酒　千代
辞めてから椅子の値打ちが〻分かり　万竿
入院をしても前職あきらめず　たつみ
出直して前職遠い夢にする　甦光
前職が顔のどこかにまだ残り　木魚
高ぶった物云い前職抜けきれず　芳子
たかがこんな許可で前職ほじくられ　健太郎
元将校休めの姿勢で立ち話　十九平
前職は会社つぶれたからのこと　暁風
顔の傷前職聞かぬことと する　どんたく

佳

前職の幅をきかせる座席順　ゆかし
前職は語らず日日の花鋏　千翁
前職はどうあろうとも自家用車　春雄
前職へ物言わぬ気の名刺出し　古心
世が世ならだけでは食えず外交員　不水
採用の通知へ前職気にかかり　秀峰
軍医だった医師の手荒な外科の処置　勝子
前職の道具が錆びたままになり　卯之助
前職の強み次点をつき離し　魚山
利権屋の手先き前職踊らされ　双楽
前職で呼ばれ町内役がつき　宗太郎
元刑事A少年からよい便り　笊柳

人

恩給にプラスアルファという仕事　古方
地
芋づるの汚職前職まで延びる　章雅
先生先生と養老院でも呼ばれ　鶴丸
天

名物

田垣方大選

倖せの余生名物食べ歩き　要次
多う過ぎるので名物はやめにする　千翁
名物の由来何とかデッチ上げ　愛鳩
同窓会名物男の死をいたむ　瑞枝
名物へふりむきもせずみかんむく　光道
名物を忘れず云うたバスガイド　保夫
名物の霧展望台は視界ゼロ　静水
名物を携げて浮気のことは伏せ　代仕男
せっかくの名物祖母の歯にかたい　藤波
臨終の口へ名物届けられ　文平
名物を買うてはならぬ忍び旅　白扇
名物は土産にならぬ空ッ風　どんたく
値頃での名物みやげに小いさ過ぎ　八九寸
オラが町の名物ニコヨン町長さん　鶴丸
名物がアリバイとなる旅帰り　千代
名物か知らぬが子供手も出さず　古心
名物は無いが大臣生んだ村　恵二朗
種つきたガイド名物など喋り　甦光
名物もまずいものではもう売れず　雄声
名物の半分かじって投げられる　奇童
新任は名物男知らされる　ろ亭
名物とほんとに出合う町のすみ　古方
名物は値上げもせずに小さくなり　健太郎
アリバイも兼ねて名物妻に買い　弘道
包装紙はぐうち名物小さくなり　芳子
名物のせんべいおんなじ味で売り　光郎
食べてから名物ときく阿呆らしさ　野迷路
名物の自慢宮内庁お買上げ　金三
名物になった由来も書いて売り　庸佑
名物にされて職場のへそまがり　弘朗
名物の見本は箱の底も見せ　砂生
名物の老舗を訪えば路地の奥　同
名物に例外としてうまいもの　十九平
名物の本家元祖が軒ならべ　同

佳

試食だけして名物を包ませず　章雅
名物をまもるノレンの色が褪せ　可住
名物はないが故郷の山と河　木魚
湯の町の名物都会から運び　奇童
名物になる程選挙に出ては落ち　弘道

人

伝説の裏付け名物だけ残り　宗太郎
地
名物はウドとフキじゃよ手洟かみ　恵二朗
天
いつからの名物でんのか知りまへん　古方
軸
団体へ名物声をからしてる

川柳雑誌
特製　柳笊
一冊（五十枚）三十円
送料　二十円

作句教室

研究題「乗り物」

清水白柳

課題の範囲が広かったので雑詠と殆ど変らない程いろいろの句を見せて頂いた。本当は投句の一句一句について感じたことや、信念を書きたいのだが、それではとても二頁や三頁で収まらないので、止むを得ずその一部分だけしか発表出来ないのを御詫びしたい。

乗り物へ子の瞳孔は開ききり　徹也

この場合の乗り物は、電車、汽車、飛行機、船、或は遊園地の乗り物など何であってもいい。その乗り物にあこがれを感じて、それに驚き、喜びに一杯になっているのだ。そこに焦点をしぼったので佳い句になったのだ。

乗り物が何かつれなき日の訣れ　安彦

これは感じの句であるが、何故か捨てがたいものを持っている。作者の老練さが産んだ表現技術の賜とでもいうのであろうか。

汽車の窓目の嵩だけの湯気を拭き　与志

すっきりとした句で申し分がない。目の嵩という句語にそのすべての情景があらわされているのである。

小説の恋は夜汽車ですれ違い　笊柳

すべての小説がそうとは限らないのだが、そこに一種の批判がある。そしてこの句は夜汽車といったので尚それが浮き出したようだ

失業の暇を環状線に乗り　文平

何もすることのない焦りと不安でじっとして居れない。バスや電車だと終点まで行けば引返さねばならないが環状線だと座って居ればまた元のところへ帰ってくるのだから電車賃が半分ですむわけ。失業の悲哀を描いていて立派な句だと思った。

大金と添い寝夜汽車でかたく寝る　みよ

普通なら大金を持ってとするところだが、大金と添い寝といったのがこの句のよさといえるようだ。

鈍行が好きとは彼も齢をとり　雄声

この句の場合の彼は他人のことではなくて自分のことなのだ。そこに自嘲といったものを感じさせられるのである。

一区間位いと母は歩き出し　酔夢

足の達者なのが自慢の母親の姿が浮彫りにされている。そしてバス代も勿体ないといって苦笑させられたのであろう。

無賃バス持ってるだけを羨まれ　静水

乗り物が只やきっと来ると言う　弘朗

旅へ出るのに旅費が一番苦になるのが一般のことなので、国鉄職員というだけでみんなに羨まれるのである。会合などでも、彼奴は運賃がいらないからなあと言われる。そこをついたのがこの句である。

運輸相時差出勤でお茶にごし　八郎

責任は国鉄総裁にあるのか運輸相なのか、市の交通局長なのかは知らないが、時差通勤をして頂くより手はないとは情ない話。

乗り物に座れば本を出して眠る　鉄舟

乗り物に乗っても小言云いつづけ　努露

乗り物でやっと飴出すお婆さん　声

この三句はよく見かけることをさらりと詠んでいるので好感のもてる句である。

乗り物は幹事まかせとついて行く　亜也

乗り物の中で寝る気のスケジュール　凡

往復ともバス最初から飲むつもり　八九寸

ミステリー旅行ではないのだが、ワイワイ言い乍らたのしいグループなのである。予算の関係で車中泊りという強行組もあれば、一方ではバスからとうとう降りずに酔いつぶれたというのもある。とに角行楽の春は楽しい。

ファミリーカー景色へ止めて昼にする　不水

自家用で犬にやる餌を買いに出る　隆史

マイカーが出来て日曜休まれず　万竿

初めの句の景色へ止めてという語が生きていると思う。次の句の犬の餌を買いに行くというのは皮肉があって面白い。日曜も休めないのは家庭奉仕でドライブをするからだろう

自転車へ入試の顔のひきしまり　白扇

寒村の文化自転車一つふえ　春雄

入試の句は作者の体験かも知れない。こんなときの自転車はとても危いから気をつけたいものだ。寒村の句はその雰囲気がよく出されていて、つつましい地味な句になっている

新幹線雨にたたられ雪に泣き　旭峯

新幹線旅情なんかを考えず　八郎

観光地駕籠で帰りは新幹線　正朗

新幹線が出来て日帰りが出来るようになったという説明的な句が数句あったが、この三句のように作者が何等かの形で句にあらわれていなければいけないと思うのである。

乗り物のおかげで地球せまくなり　千梢

乗り物進化地球をちいさくし　句楽坊

ジェット機のおかげで世界中どこへでも数時間乃至十数時間で行けるようになったのだがこれだけでは句が浅いといえるようだ。

乗り物の時代宇宙でランデブー　釣月

ロケットに切符で乗れる日のいつぞ　秋月

米ソの宇宙競走に世界中の眼が集まっているのである。そのことだけを句にまとめても説明になってしもう。矢張りロケットの句のように作者の感じが顔を出すように心がけたいと思っているのである。

ネッカチーフにしがみつかれてから飛ばし　要次

信号が青でもこわいダンプカー　幸子

ダンプカー男一匹つっ走り　秋月

現実の地上では毎日こんなことが起っているのである。単車でとばす若い人達の神経には命など何とも思っていないような気がする。信号の句には弱い市民の心がうたわれていて共感が持てる。男一匹の句はその言葉だけの句に終っているのは惜しい気がする。

たまにのるタクシーとめるひと苦労　八重野

タクシーを拾えばほんのそこだった　清泉

荷物でも持っているのだろうか通り過ぎる車ばかりである。止める要領を知らない人の姿を描いている。ほんのそこだったという句にはユーモアがある、土地感のないものにはこうした事がありがちなのだ。

サラリーマン満員車でも読みこなし　孚彦

歩いても行けずラッシュに割って入り　千代

ラッシュアワー連れだけ乗せて辷り出し　静観堂

初めの句は読みこなしという語に、次の句は歩いても行けずという語に、後の句は連れだけという語に句の焦点があると思う。

バスのすみ肩たたかれて飛びあがり　晴子

国訛り故郷へつづくバスにゆれ　李朋

ガソリン代浮くのかバスは僕一人　笊柳

この三句のうちでは最後のガソリン代を心配している作者の句に共感が持てるようだ。

そのほかに運転免許も持って嫁き　あいき

とりたての免許誰れでも乗せたがり　酔夢

同想の句もあったが、運転免許もというもの一字の含みがよかった。とりたての免許の句はすらりと出来ているのが取得だろう。

夕焼けパパ出迎えの三輪車　李羅

情景をよく描き出していると思う。三輪車の句はまだあったがこの句にかなわなかった

公園の木馬に春の陽があふれ　明子

木馬館児を追う父の眼が疲れ　凡

ブランコにズボンのママも汗をかき　弘生

情景描写だけに終ってはいけないと思う。その点二句目の眼が疲れという作者の感じはよく出されている。

一才にしてもう乗り物の本が好き　千代

乗り物のおもちゃへ科学する父子　保夫

うちの子は乗り物なら何んでも好きでと親馬鹿を発揮しているのが目に見えるようだ。

頂上のまだその上の飛行塔　辰始

遊園地の乗り物の句は数多くあったがこの句の風刺にはかなわなかった。限りない人間の慾望を作者の眼は刺っているのだ。

船車馬よし飛行機だけ遠慮　勝子

41年10月

天満橋に進出

新らしいマツザカヤに

ご期待ください

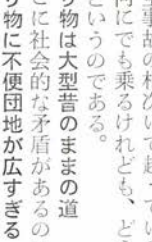
大阪日本橋

松坂屋

電 631－1171

雅号ぶっちゃけばなし（11）

かいむき



つきやま

築山快夢起

ハワイの柳人には、魔花麗（まかれい）とか紅溪（こうけい）とか地名を雅号に用いるのがあるように、私の雅号快夢起も十五年前まで住んでいたカイムキからとったもので、今一つは、私は生来健康に恵まれ快食快眠快便を自慢にしていた者ですが、寄る年波には勝てず便通の方が大分怪しくなってきました。然し快食と快眠の方は若い者に負けず、殊に眠る方は随時随所、眼を閉じさえすれば、すぐにトロリとする至って都合のいい体質で、従って見る夢も円らかで快く起きるのが毎朝の例になっています。快い夢で起きる、快夢起と号するの弁以上の通り。

快い夢で起きられ有難や　隠退無職・七十六歳

航空事故の相次いで起っているこの頃である。何にでも乗るけれども、どうも飛行機だけはというのである。

乗り物は大型昔のままの道　旭峯

ここに社会的な矛盾があるのであろう。

乗り物に不便団地が広すぎる　章雅

ここにも団地はこしらえるが通勤のことまで考えないことに対する批判がある。

安心の出来る乗り物なにかしら　双楽

気の弱い話であるがこうも交通事故があるとこんな気にもなるだろう。

乗り物に弱くて旅の味知らず　明子

年寄りのケチに見ゆるか車酔い　湖平

転勤と聞いただけでも妻は酔い　松風

旅の味知らずという句はよかった。そこには諦めに似た思いがある。年寄りの句もよくまとまっていると思う。転勤の句には勤め人の悲哀というか、そうした事までを含んでいる佳句であると思った。

栄転へ派手に別れをするデッキ　芳子

この句も勤め人を詠んでいるが明るい感じを持っていてよいと思う。

下車近しも一度念を押す化粧　砂生

女心の描写であるが、念を押すという言葉が生かされている。

退院車砂塵をまいてさようなら　秀歩

それを見送っている人の悲哀感を見ることが出来るようである。

バス代が同んなじだのに割込まれ　千夏

肥えたのも痩せたのも、混んでも混まなくても同じ値段、そこに面白さがある。

大井川日本晴れのかごに揺れ　紫

昔はこうだったろうという句である。

ピラミッド駱駝で廻る胸を張り　専翁

世界一周をされた作者の思い出の句である

乗り物が人間の足不精にし　金三

人間の足乗り物に錆びてゆく　安彦

不精にするという説明的な語よりも、錆びてゆくという感じの語の方を採りたい。

貫録へ車掌も言葉あらためる　与志

ええ年をしてまだ模型屋をのぞきこみ　古方

六月号発表・締切四月二十日
研究題「叩く」　五句以内

七月号発表・締切五月二十日
研究題「味」　五句以内

宛先　大阪府南河内郡美原町丹上四〇四
清水白柳

西郷かの女著

句集「輪廻（りんね）」

一五九ページ
定価五〇〇円

序文・川上三太郎・中島紫痴郎

一杯のコップ酒はビンからでなく樽からのを享けたい。西郷かの女の句はまさにそれである。と三太郎氏が述べていられる。

発行所　東京都台東区下谷二丁目
二〇番—九号

川柳研究社

金泥集

麻生葭乃選

「箱」

救急箱の赤チンへらぬ子の成長　美代
銀行がサービスに出す貯金箱　トメ子
空箱につめて故郷から母の餅　酔夢
箱書にだまされていて法螺を吹く　千夏
ママの留守ままごと遊びに化粧箱　あいき
虫くった箱が値打と気がつかず　青女
ピョピョと鳴った箱へガラス置き　千梢
仮箱で菓子とどけ合う仲であり　阿茶
若き日の思い出千代紙はった箱　小石
旅なれていながら箱師にしてやられ　清子
穴だらけ箱の中味はヒヨコなり　同
貯金箱　銀行からのプレゼント　花梢
箱入りの恋は実のらぬままに消え　同
拝観料も取って賽銭箱も置き　勝子
箱振って中身を当てる土産物　同
箱見ればイミテーションとは思わず　一栄
知恵の箱孫にテストをさせる羽目　同

佳作

箱火鉢長いきせるで切り盛りし　千梢
上げ底の箱で一応義理すまし　勝子
空箱に春の芽がふくわびずまい　酔夢
化粧箱さげてせわしくスターの座　小石
アパートへ五点セットで嫁くらし　一栄
菓子箱と別な包みは受取れず　清子
トリックの手品の箱へ喝采し　同
ゴミ箱が知る奥さんの世帯もち　花梢
空箱もつんで開店スタートし　同
まがりして箱の背広は入れたまま　青女
デコレーション大きな箱でいたわられ　同
芸一筋三味線箱に札を入れ　阿茶
栖鳳の雀は桐の二重箱　同
箱にまで掛けさせ屋台よくはずり　きさ子
公園の日和何やら箱の店　同
箱積んだ空地箱から月が出る　同

軸

引き揚げの人へ紙箱御用だて

★

六月号発表「血統」4月25日着便まで

友の会の方々へお願い

平抜きと佳作の二種別にわけ、特に三才とか五客とかにきめない事にしました。佳作の中には三才のねうちのある句が二句あるかと思えば、四句も五句もある事もあります。無理に等格をつけては、選ばれた三才の一句、一句に大変なひらきがございます。

作句は決して競争ではありません。生活に潤いをつける大切な糧としてよりよき心境を造ってゆくためです。

自分はどこまでも自分らしい句を作って行くのが作句精進の本来の姿であると私はいつも考えています。皆様もそのつもりで、楽しんで他人の句を読んで下さい。苦しんで自分の句を作って下さい。

（麻生葭乃）

第百七十九回（新年度第七回目）

大萬川柳

兼題「図書館」

入選発表

選者　清水白柳

投句総数　六百四十三句

入選　六十七句

図書館を抜けてベンチで春の夢　米子　瑞枝

図書館で読みたいページ引きさかれ　大阪　明子

まっすぐに行く図書館に夢があり　玉島　里風

図書館の壁が知ってる苦学の日　羽曳野　白扇

居眠りもいる図書館の蟬しぐれ　島根　李羅

図書館で今日も孤独の本をあけ　島根　李朋

図書飢で喋る女を眼で制し　広島　露声

図書館で先んを越された参考書　島根　芳子

就職へ僕の図書館よさよなら　笠岡　要次

図書館を出て空腹を覚えたり　下関　不水

図書館と言えば用事もせずにすみ　大阪　弓彦

図書館は活字に飢えた顔が寄り　島根　代仕男

パスしたので図書館で雑誌読む　泉大津　徹也

図書館に遠く電車の軋む音　宮崎　卯之助

図書館に紙魚と眠った古書の皺　大阪　滋雀

図書館に通い家業を振りむかず　加賀　久雄

書名だけうつして図書館からかえり　豊中　古方

図書館へ教育ママの眼をのがれ　堺　一舟

図書館で落ちた同志がまた出会い　大阪　竹荘

図書館で読んで本買う金送れ　大阪　一栄

図書館でポケットの飴まさぐられ　大阪　金三

移動図書館ボクもワタシもワンワンも　京都　八九寸

図書館にあの娘が見えず手につかず　大阪　琴女

図書館があり貧しさを口にせず　篠山　可住

図書館にこんにちもなしさよならも　加賀　光郎

図書館を抜けてゆく娘に恋があり　東京　泰造

新聞が閉じてあるので行く図書館　倉吉　弘朗

図書館の机で苦学寝てしまい　大阪　文秋

顔それぞれきびし図書館うす暗く　大阪　章雅

図書館で三浪無精髭を撫で　石川　宗太郎

横顔が好き図書館の席を決め　富田林　美房

図書館の順ライバルへ気にかかり　大阪　柳志

図書館でよく逢いイニシャルを覚え　笠岡　桃里

図書館でデートするとは知らなんだ　高槻　静馬

図書館があり貧しさにへこたれず　岸和田　きさ子

恋を得てもう図書館があほらしく　大阪　梅里

図書館に淡い恋あり目礼す　岡山　照路

図書館に仕事さぼったのもまじり　児島　恵二朗

失対にあぶれ図書館の隅に居る　大阪　没食子

図書館で咳をするにも気をつかい　香川　酔夢

早い目に出る図書館は昼を抜き　大阪　萬

六三制その後は図書館友にする

麦青く移動図書館とりまかれ

四月の句会

玉造川柳会

時　十一日（月）午後六時

題　会・弾力・非行

所　玉造交差点南へ百米　大阪信用金庫

南海電鉄川柳会

時　二十日（水）午後六時

題　脱線・売れっ子・負けん気

所　ナンバ高架下　新和クラブ

南大阪川柳会

時　二十日（水）午後六時

題　パートタイム・腰抜け・ナガラ族・線

所　アベノ松崎町三ノ一〇　割烹　大萬

笠岡　遠二

図書館はよし青春の血を鎮め
図書館へ通い眼鏡の度が進み

布施　清人

図書館へ行くなら母も信じ切り
図書館で仕入れた智恵で家裁へ来

西宮　多久志

三浪のキャリア図書館のぬしとなり
いまに見ろと図書館へ通いつめ

南河内　吸江

図書館で日頃の疲れを寝てしまい
図書館に休日あるを不思議がり
大器晩成図書館に顔が売れ

奈良　凡茶

図書館のなじみ隣りへ席をとり
図書館の寒さ頭へよくは入り
図書館の勉強無口な子に育ち
筆記する音も図書館耳につき

図書館は満員芝生で本を読み
天理さん拝まず図書館だけ利用

五客　米子　千代

しもやけの手で図書館の辞書をひく

笠岡　要次

図書館に姉も来ている眼が笑い

大阪　旅風

図書館の椅子の堅さが覚えさせ

和歌山　木魚

図書館へ行かせお百度詣りする

大阪　梅里

浪人悠々として図書館で眠り

人ノ句　玉島　旭峯

図書館を出て雑音に振りむかず

地ノ句　大阪　柳志

ウィンクしただけで図書館読みつけ

天ノ句　泉北　好郎

図書館ではねむくうちでは騒がゝ

選者吟

アィデアに迷い図書館まで出かけ

大萬川柳ベストテン

（三月現在）

一	**水客**	一八、〇	大阪
二	**梅里**	一六、五	大阪
三	**好郎**	一六、〇	泉北
四	**吸江**	一六、〇	南河内
五	**柳志**	一四、〇	大阪
六	**美房**	一三、五	富田林
七	**清人**	一二、〇	布施
八	**可住**	一一、五	篠山
九	**桃里**	一〇、五	笠岡
一〇	**阿茶**	一〇、五	大阪
一一	没食子	一〇、〇	大阪
一二	木魚	一〇、〇	和歌山
一三	万竿	九、五	松原
一四	静馬	九、〇	高槻
一五	痴亭	九、〇	大阪
一六	宗太郎	八、五	石川
一七	凡茶	八、五	奈良
一八	きさ子	八、〇	岸和田
一九	光郎	八、〇	加賀
二〇	圭井堂	八、〇	堺
	竹荘	八、〇	大阪

以下略

次ぎの兼題「耳」　五句以内
締切　三月二十五日
発表　四月二十日

四月の兼題「免許」

締切　**四月二十五日**
発表　五月二十日
投句先　大阪市阿倍野区松崎町
三ノ一〇

大萬川柳会

雑詠

大阪市　橋本緑雨

つまずいたことから老人愚知を云い
みかん一つ夜はながながし

長野県　高峰柳児

器用さを買われ社宅へ使われる
アイシャドイエスかノーかをすぐにきめ
実印をまかせ落目をかみしめる

煎餅を割る音座談会しらけ

大洲市　米沢暁明

正面の席ふさがらず会がすみ
ポケットの十円足して用がすみ
理容師の小刻み空も切る鋏
真相をきけばくだらぬ小競りあい
寒椿あなたも恋をせよと咲く

和歌山市　秋月宏方

免許証までもあるのに嫁き遅れ
共白髪まで一号で間にあわせ
わらじで行った日のこと思うバスに乗り
アィデアはトイレで出来たともいえず

松山市　月原宵明

食堂へ来ても外さぬサングラス
行ってらっしゃいと裸銭渡し
角かくし父の涙を見てしまい

名古屋市　長谷川鮮山

この辺でよしましょうやと手を切る気
決められた予算の中の記念品
賞め言葉とっさに出ない形容詞

柳界展望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

（橘高薫風・担当）

☆大野風柳氏（新津市）は「柳都」二月号誌上で「最近私が好感をもつものに、『川柳雑誌』改題（この改題が気に入らぬが）の『川柳塔』が、麻生路郎の殻を破りつつあることと、『番傘』も、まだまだ依怙地な面があるとしても、主幹砂人の円満な人格を中心に、水府が不足していたものを持ちこもうと努力していることである。正直言って、雲雀の言う横の疎通は、むしろ関西の水府、路郎によって種がまかれていたと私は思っている。だからこそ新生『番傘』、改題『川柳塔』の開眼は、まさに日本柳界のよろこびでもある。」と述べている。

☆麻生路郎先生の遺志を彰わすため、麻生家から寄附された資金で、この程、大阪市立中央図書館ではスチール製の書架を購入、短詩文学文庫の一室に設置された。

☆麻生霞乃先生（奈良県）は一月下旬、お家の階段から落ちてひどい打撲傷のため約一ヵ月ずっと臥ておられたが、二月二十二日初めてペンで葉書を書ける程によくなったと寄信された。

☆清水白柳氏（大阪府）は二月十九日西大寺市の鐘紡労働会館で開催された第十五回西大寺会陽川柳大会に選者として出席、翌二十日のサンケイ新聞紙上に「川柳の三要素に批判性を盛り込み、既成柳人は若い世代にそっぽを向かれぬようい っそうの努力が肝要」と談話を掲載された。なお、氏揮毫の手拭「春日遅々として仁王さん眠くなり」は参会者の好評を得た。

☆川柳さっぽろ百号記念、昭和四十一年度知事杯争奪誌上川柳大会を開催。兼題三句詠。浮き沈み・師弟・真剣・重ねる・ばりばり・仲間・結ぶ・繁栄・飛躍・生命・頑張る・雄大、各題別紙一八糎と七糎の句箋に住所氏名雅号並記の上、五月五日までに札幌市北二十条東四丁目（美香保公園管理所内）沢田好苑宛。投句料二百円。

☆園田五周年記念川柳大会は三月二十日（日）正午から選者から司会者まで女流作家ばかりという会が伊丹文化会館三階会議室で開催された。川柳塔社から山川阿茶さんが選者として出席

☆故塚越迷亭氏一周忌追悼の集いが三月十三日（日）午後二時から南千住の回向院で開催、法要後、団子坂の「魚新」で故人を偲ぶ会があった。

☆服部十九平氏（岡山市）は会陽川柳大会のあと、あや子、一也、一藤の諸氏と同道、白柳氏を案内して闘病生活中の柳人、岡崎和治氏居を訪問歓談された。

☆阿部佐保蘭氏（東京都）は一月七日、故ブライス博士の霊前に額づき、未亡人と話されたが、この程、未亡人の紹介で、川柳翻訳研究会の三十周年を記念して来る昭和四十二年に佐保蘭氏著、「川柳と翻訳」が北星堂から出版されることとなった。

☆第十四回俳諧かほる会は二月二十日午後一時から高円寺須田商店で開催、出席者の「川柳朗読テープ」を録音、現在五十七名の声を集録された由。

☆八木摩天郎氏（堺市）は堺市成人学校川柳講座を担当されていたが、この程その同窓の集いを結成、第一第二回は摩天郎居で会合、若芽川柳会と命名、毎月第三木曜日に錦綾会館（綾之町電停下車、錦綾小学校前）で開催することとなった。連絡所は堺市香ケ丘町二丁九吉岡俊雄方。

☆酒田清子さん（大阪市）は二月末長期療養中の市立桃山市民病院を全快退院された。入院加療中、寄せ書や見舞いを相次いで寄せて激励を受けた柳人諸氏へ感謝の意を伝えて欲しいとのこと。

☆藤井明朗氏（島根県）は二月二十二日社用で来阪の寸暇を川柳塔本社へ寄られ生々庵主幹、小石のご夫妻や編集部の一三夫氏と歓談された。小石夫人は松江の女学校の出身だそうで大いに話の花が咲いたが、明朗氏は同夜ミナミの明朗館という旅館で泊られた。

☆築山快夢起氏（ハワイ）は川柳塔社の同人をふやすため、または購読者増加へ同地の新聞で呼びかけておられる。

川柳自選句集
甲斐田桜里著
歌里
序文・噴煙主宰
大嶋濤明
句集ご希望の方は送料五〇円を添えて左記へ
熊本市出水町国府二〇八八
川柳噴煙吟社

☆山内静水氏（竹原市）から「竹原川柳会の記念句会はその四割が学生という若々しいものでした。卒業生には白柳氏の染筆短冊などを贈呈して三年間の努力をたたえ、将来の活躍を激励いたしました。」

☆河本南牛史氏（松山市）から「二月八日に松山を出発して、和歌山、奈良、伊勢、京都から名神ハイウエイを観光と信仰の旅を続けました。来る四月二十四日は四国川柳大会の予定で、二十五日には路郎夜乃ご夫妻の曽遊の地、砥部焼窯元の見学などもありますから柳人多数のご来松をお待ち致しております。」

☆久米奈良子さん（布施市）は二月十六日から二十日まで天王寺美術館で開かれた関西女流書道展の仮名の部で特別賞を得られた。紫舟と号して日本書芸院のホープであり、お弟子さん百余名をもって書道に精進しておられる。

☆神谷凡九郎氏（大阪市）は二月二十一日高津病院を退院、十二月十六日以来、頸推間板ヘルニヤのため入院加療されていた。

☆若本多久志氏（西宮市）は三月十六日、尼崎西ライオンズクラブ例会で「川柳よもやま話」の演題で講演され好評だった。

☆井上吉次郎氏（枚方市）からのおたより『よくぞ女に生まれける』を敬読。小生、四月から新設の追手門学院大学で社会学を講義します。若人ひしめく世界で随分の老骨、壇に立って倒れねばよいがと心配する向きもいます」と。

☆小畠無聖氏（兵庫県）は家沢薺花氏と前後して十四五年前に田不朽洞会から離れられたが、丹波川柳社を小西無鬼氏らと創立するに当り川柳塔社同人として再起されることになった。ご発展を祈りあげる。

☆大坂形水氏（大阪市）はO・S・Kの社長さんだが社員の中から川柳愛好者二十数名を集め第一回句会を2月24日に開かれた。なお清水白柳氏が選をされ、こんごの活躍が大いに期待される。

☆川岡霊眼子（諫早市）の長男俊晴さん（19才）はスポーツの万能選手であるところから東京世田ケ谷国士館大学へ無試験合格され入学式には霊眼子ご夫妻も同伴、東京、大阪、名古屋の見物を予定され、旅に出るよろこびにコドモのようであるとのおたよりがあった。

☆浜田久米雄氏（岡山県）からのお便り「国鉄での友人らと海潮（うしお）温泉に来ています。山の中なので古めかしい旅館をと期待していたのに建物設備とも近代的なので失望しました。2月19日に白柳氏が西大寺会陽の句会にお出でになったのにお会いせず失礼いたしました。みなさまによろしく」と。

☆渡辺暁童氏（愛媛県）はミゼットから落ち十日間の賜暇静養されているとのこと、お大切に。

☆満田忠士氏（岸和田市）は2月8日付のサンケイ夕刊の〝わたしの発明品〟にひと塗りでどんな指にもぴったりを発表された。

☆今西章雅氏（大阪市）の長女順子さん（大手前短大卒）と大阪市北区北扇町四六の模本竹次郎氏が四月十七日郵政会館で結婚式を挙げられる。おめでとう。

☆久家代仕男氏（島根県）は氏の職場で川柳を指導されているが、二月には尼緑之助氏を招かれ、いよいよ軌道に乗りつつあることをよろこんでおられる。

☆吉田圭井堂氏（堺市）の二女多美重さん二十二歳は今春武庫川女子大学文学部で四年の学業を終えるに当り、父上の影響か「古川柳に於ける徒然草と兼好」と題する女子大生には珍しい卒業論文96頁が無修正でパス。ご本人は就職希望だがご両親は花嫁修業を家庭でさせたいとのこと。

☆岩田美代さん（富田林市）は鹿児島の史跡を巡り、桜島を眺望、垂水の港から一里のところで、多忙の日々からぬけて清遊のよろこびに浸っておられる様子を、「大家内きょうの孤独がうれしくて」と寄信された。

☆戸田古方氏（豊中市）の長男陽一氏は五月十一日、昱子さんと結婚、新阪急ホテルで挙式される。お慶び申し上げる。

☆井阪東天紅氏（和泉市）の住居がつぎのとおり改称された。大阪府和泉市府中町三丁目十四番五号

☆加川靖真氏（大阪市）の厳父が二月二十一日肝硬炎で永眠された。厳父も川柳家で川雑にはおなじみ深い人だった。謹悼。

☆第二回常任理事会は三月四日午後六時から川柳塔社楼上で開催。関連記事は43ページ。

社本 三月句会

会場　自安寺
41・3・8・午後6時

入選句多数でスペースなく六十六氏の出席者名は次号で発表。（河井庸佑整理）

席題「香水」　酒田清子選

香水にも好き嫌いある姉妹　操子
香水を匂わす女の嘘を聞き　いさむ
散髪屋ガソリン臭いやっを振り　痴亭
追っかけてきて香水をつけて呉れ　水客
ジャスミンがくすぐるバスの主　竜子
国産の香水でよい勤めもつ　仙入
一滴もない香水瓶しまっとき　痴亭
パトロンが変り香水もかわり　好郎
好きな香水ふって気ままなひとり旅　きさ子
香水をかえてきたのをちゃんと知り　庸佑
ホテルから出る香水は別に持ち　白柳
贈られた香水つけて会いに行く　庸佑
ぜいたくでない香水の人となり　与呂志
PTAわたしもコテー使うてます　梅里
卒業式母に隠した香が匂い　滋雀
香水がワキガとミックスして匂い　一三夫
逢いにゆく日の香水はずんどき　清人
香水の匂いと別な顔がいや　淡舟
香水でデートと知れるほど匂い　圭井堂
香水を振って還体の娘と別れ　玲人
結婚の記念日と言う寝間香水　淡舟
香水の香が鼻につく通夜の席　一栄
君の心へふりかけて見たいネ香水　凡九郎
香水をするりと抜けるいそがしさ　与呂志
襟先きの香水人柄ただよわせ　生々庵
時ならぬ香水社長室に消え　静馬
香水のもう体臭となる暮らし　生々庵
香水を変えてデートは海にする　玲人
たしなみという香水も老妓なり　一三夫
香水にかこまれ男無口なり　あきら
香水でパパの脱線あばかれる　千梢
香水のにおいが春の風にぬけ　たつみ
香水の土産は娘一人じめ　トメ子
香水など思いもよらぬ子沢山　一栄
香水も時々かえる飼育法　梅里
香水の匂いとちがう顔を見せ　葛城
香水をかえてもパパは鈍感な　梅里
香水の売場嗅ぐだけ嗅ぎまわり　小松園
あのひとと知る香水の名は知らず　すゝむ
見舞いの娘ベッドへ香水ふって去に　清子

席題「はったり」　本多柳志選

保護室のはったり醒めて小そうなり　美房
はったりにまんまとペース狂わされ　季賛
はったりの効く同僚がする出世　白渓子
あと押しがあるはったりへ逆らわず　玲人
はったりのあるホステスの稼ぎ高　多久志
はったりで税務署さんを煙にまき　圭井堂
はったりが効いて今更断れず　きさ子
はったりは神も味方に引き入れて　武助
はったりが屋同士の話0が増え行き　一三夫
はったりのつじつま合わす電話口　入仙
はったりの久しき髭に白いもの　宣介
はったりを利かせたわしを売り歩く　よしを
金ぶちの名刺はったり効いていず　痴亭
はったりを見抜いた煙は空にはき　中性尼
貫録に押されはったり引込ませ　文秋
色欲のためのはったりとは知らず　清人
はったりで儲けた金を馬ですり　静歩
ふる里へちょっと風呂敷拡げすぎ　一栄
はったりのネオンは消えたままのビル　滋雀
はったりが我が行く道を狭くする　弓彦
ふる里へ一寸風呂敷拡げすぎ　一栄
はったりを五割引して苦笑する　吸江
はったりも利く内が花店を閉め　よしを
はったりの出来ぬ男で乗りおくれ　古方
はったりをきかすバッジはよく光り　栞
はったりで建てて利息に追われたり　梅里
はったりの声は肩まで角をもち　凡九郎
看板で古い二階をかくすなり　白柳
はったりのパパに似るなと子をつけ　水京
原爆を持ってはったり無気味なり　あきら
はったりをかけてもマダム先をまえ　千梢
はったりを効かせあとから梅くなり　竜子
ハッタリを利かすつもりの借衣装　多久志
はったりも程程でよし酒の酔い　梅里
はったりでする改装と他人は見ず　文秋
はったりもやまこもなくて平で老げ　柳宏子
はったりがばれて世間を狭う生き　いさむ
はったりのない人生で恙なし　梅里
三周忌まだはったりはげていず　柳志

席題「誤植」　冨岡淡舟選

ははあん誤植やなあと読み流し　清人
課長が見のがし社長が誤植拾い　生々庵
答案の誤植見つけたのにスベり　孚彦
解釈を全く逆にする誤植　玲人
拾い読みしたら誤植が二つ三つ　操子
ふりがなをつけて誤植のままで出し　白渓子
大体の意味は誤植でも解り　宣介
情熱も誤植のままに3号誌　柳志
重要な誤植小さく謝まられ　弓彦
誤植だと思えば原稿違っとり　白渓子
ウナ電が誤植のままで届けられ　中性尼
誤植記事課長にやにやを見る　季賛
誤植だとわかりまあまあですませ　吸江
誤植され三国人と間違われ　たつみ
社長るす誤植見つけた祕書のひま　滋雀
ご訂正致しましたと隅のすみ

誤植では済まぬ大内山の記事　圭井堂
誤植通りニックネームをつけられる　多久志
誤植では済まぬ一字の持つ力　すゝむ
二流紙の誤植笑うて見すごされ　柳宏子
ローカル紙誤植だらけで発刊し　きさ子
戦前は「陛下」が「陛下」でクビになり　一三夫
年令の誤植女は承知せず　柳志
誤植など問題でない三号誌　中性尼
又誤植かと変な雅号をうれしがり　栞
詩のいのち誤植でしたですまされず　生々庵
紙きれをはさんで誤植お詫びする　清人
忠実に原稿通り誤植する　静馬
人生へ誤植のように生きてよし　水客
誤植誤植この頃恋のタイピスト　たつみ

兼題「テコ入れ」　辻白溪子選

テコ入れてやった仕事に出る祝儀　武助
テコ入れに来たとは言わぬ握手する　水客
時勢には勝てず老舗もテコがいり　すゝむ
テコ入れを素直に聞いて乗っ取られ　いさむ
テコ入れをしてる会社が先ずつぶれ　柳志
テコ入れが効いたか老舗持ち直し　誓二
暴力団テコ入れされてもこりず生き　千梢
テコ入れの条件として社を追われ　柳志
はえぬきの長老というテコを入れ　静歩
テコ入れへ銀行ソッポ向いたまま　たつみ
テコ入れのいる団結をもてあまし　凡九郎
テコ入れをされたか急に強い腰　庸佑
テコ入れてからヒモつきだとわかり　梅里
テコ入れがここらでほしい町工場　清人
陽炎の直線へ保線のテコを入れ　白柳
その裏に気付きテコ入れ辞退する　一栄
大店の危機へ問屋がテコを入れ　柳宏子
テコ入れをした親会社の方がつぶれ　文秋
テコ入れを政府がやって勘ぐられ　美房
テコ入れる裏にみにくい政治あり　与呂志
商人は儲け口だけテコを入れ　句楽坊
テコ入れるパトロンがあり強気に出　淡舟
テコ入れの限度に本家が腹を立て　生々庵
テコ入れの話社長も退くらしい　あきら
テコ入れに銀行きつい案を出す　形水
テコが利き過ぎて無口の二三日　小松園
候補へのテコ見えすいた車中談　八九寸
テコ入れのつもり無心突き離し　好郎
テコ入れがきき過ぎ会社ストに入り　トメ子
人事異動してテコ入れてみる　操子
テコ入れを息子は知らぬげに費い　金三
テコ入れがカンフル程に効く企業　美房
テコ入れの黒幕がいる床柱　与呂志
土壇場まで待ってテコ入れする　水京
最後にはやっぱり父がテコを入れ　操子
テコ入れる積りで支店長を呼び　操子
弱点を知ってるテコ入れ口が過ぎ　白溪子

兼題「凡人」　金井文秋選

仮面脱ぐとき凡人の息となり　竜子
手紙だけは呉れと凡人らしくなり　水客
運命のままに凡人清く生き　花梢
破れ鍋に綴じ蓋共に風引かず　八九寸
凡人の気楽さ泣こうと笑おうと　あいき
日の出拝んで凡人は鍬をとり　淡舟
凡才も惚れた欲目で偉く見え　柳志
凡人の弱み邪教と言うとれず　美房
凡人を手本に生きる歳になり　一舟
聖人君子ただ凡人の変り種　吸江
凡人のこんな事にもうまい酒　凡九郎
本名も雅号も凡人名をなさず　竹荘
凡人と凡人同士賢こがり　宣介
凡人を自覚しているからの愚痴　いさむ
小春日へ凡人あくびばかりが出　圭井堂
凡人の妻でよかった切り回し　痴亭
一筋に生きて凡庸恥とせず　偉大なる凡人私の母のこと　生々庵
凡人の夢中庸をこころざし　梅里
凡人同士われかおれかで飲むうま　静馬
市場籠さげて凡人気楽なり　竹荘
凡人でよかった家のおとうさん　静歩
たとえ粥すすり乍らもよい夫　圭井堂
凡人であるから欲しゃダイヤモンド　誓二
どう見ても非凡にあらず平社員　多久志
凡人が凡人でなくなる名誉職　忠雄
凡人でこそ親の職継いで呉れ　圭井堂
凡人を歴史は神にしてしまい　一三夫
凡人のまるい言葉へ気がほぐれ　白溪子
悲しみへ涙ひとなみ溢れて来　滋雀
凡人の好き単純に信じ合い　与呂志
どんぐりの背くらべが寄る席温し　与呂志
凡人をひげで隠して占い師　よしを
食いつめて凡人易を見て貰い　竹荘
一生を鳴かず飛ばずに暮しチョン　滋雀
凡人の素直さで勲章嬉しがり　生々庵

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二 — 四
夜間 (762) 四四〇八

我れもまた凡愚の一人神だのみ　文秋

兼題「間食」　水谷竹荘選

間食がすぎて主食を胃がこばみ　あいき
間食も酒もカルテにしばられる　秋月
「ホッコリ」が来たら間食を芋にする　章雅
甘いものくれない間食物足らず　阿茶
間食は何かと問うて靴をぬぎ　千夏
すきを見てもぎり素早く口に入れ　春己
間食が過ぎて胃散と友になり　誓二
共かせぎ子に間食の癖がつき　葛城
育児法また間食で姑ともめ　柳宏子
間食を叱る大人は煙草すい　句楽坊
間食は果物美容食とか言うて　淡舟
間食にも工夫こらす料理好き　すゝむ
やせたいと言いつつ間食やめられず　庸佑
間食代書かず家計簿尻が合い　一舟
家計簿もつけぬ女のてんやもん　文秋
間食のラーメン弱い胃にもたれ　与呂志
おやつどき課長も加わるあみだくじ　静馬
山村のおやつは柿や栗で足り　中性尼
間食は要らず四、五回めしを食い　あきら
かくしても医者は間食知っており　清子
間食は言わず食事すみません　清子
課長留守さっと回ったアミダくじ　吸江
うどんでも食べきょうの腹具合　烏荘
消化剤飲み飲み間食止められず　よしを
手のこんだオヤツ祕法はママのもの　孚彦
看護婦が出てからこっそり間食し　静歩
間食をしてから勉強ねむくなり　操馬
間食へ仏壇拝んだ手が伸びる　滋雀
村の子の間食うちもふかし芋　淡舟
宴会があるので間食控えとき　庸佑
夕食が進まず間食ばれており　季賛
間食の好きな子供をもて余し　柳宏子
晩酌のたのしみ間食ひかえとき　舟遊
間食がすぎて胃下垂なやまされ　干梢
老夫婦間食もへらず庭いじり　古方
間食のカロリーまでも考える　好郎
間食がすんでも大工まだ休み　梅里
幕間で食べて喋ってコンパクト　中性尼
ちょうどいい時に石焼いもが来る　双楽
間食のアミダに勝ってロハで食い　あきら
お三時という間食が高くつき　白溪子
女子寮の間食焼芋屋が待たれ　白溪子
間食を辞退した筈飲む話　武助
託児所の予算ハミ出す間食費　多久志
昼めしをぬいてお三時目あてなり　生々庵
年寄りがいて間食をさせたがり　白溪子
おやつ代りですよと派手な見栄をはり　生々庵
集金にマダムおやつを提げてくる　静馬
間食がすきて夕げのまずい酒　操子
市場籠同士帰りの喫茶店　入仙
間食へ日曜大工汗を拭き　清人
高い手間賃出しておやつに気をかい　静馬
間食へ玉露楽しむ年になり　一栄
間食の時間忘れず子は帰り　竹荘

兼題「近い」　菊沢小松園選

あやつりの紐数読めるかぶりつき　八九寸
お目出度が近いお腹で送りに出　春己
歩道行く女に春がもうにおい　花梢
いつでもと思う近さの人が嫁き　旅風
近いうち迎えに来ると放っとかれ　あいき
手のとどく所にきれいなその花　阿茶
ほど近い氏神さまへも無沙汰勝ち　繁太郎
すぐそこや近い近いと歩かされ　栞
近いほどものがぼやける年となり　庸佑
万一の頼りにお近い両隣り
ご近所をきれいな嘘で通り抜け
嫁ぐ日も近く気ままも聞いてやる
清貧に近い暮しと思うとく　水客
近いうちお返ししますとそれっきり　清子
妻という身近かな味方をフト忘れ　一三夫
更衣室の噂が近い仲にする　栞
近道を曲った車行きつまり　入仙
再婚を手近かなところで間に合わせ　美代
近いので挨拶はただ手を挙げるだけ　宣介
近い火事野次馬の気にはちとなれず　二
面目のうて近所の医者に診せられず　誓
結婚も決まりデートも大っぴら　静馬
里帰り近い実家に物足らず　金三
嫁く日近く手紙の整理一人する　いさむ
近くまで来たから寄ったのに借られ　水京
理屈だけ言うてあの世が近くなり　美房
お別れが近いと知ってるはしゃぎよう　静歩
近くまで春が来てます梅だより　水客
カメラが近かったのニキビまで写り　白柳
留守番の子へ足音が近くなり　清人
返済期こうも近いとは知らなんだ　専翁
一回りさせてお隣りまで嫁き　滋雀
児が産れ親の近くへ越すと言う　竜子
上役の隣りに住んで用が増え　たつみ
退院が近し慌てて見舞に来　文秋
広告やテレビが春を近づける　きさ子
お近いうちにとはチップ効いたら　生々庵
保険屋が近所の火事を例にひき　一三夫
近いうち飲もやで今日も逃げられる　静馬
ひと言がおんなを近いものにする　水客
顔近よせて話す野心を見すかされ　入仙
目と鼻のとこでライバル生きる道　生々庵
雷鳴へ段々女近う寄り　栞
振りかえる女の顔が近すぎた　小松園

★

新年号発表の本社句会―一円貨車掌邪魔くさそうによみ―の句者を清子と訂正。

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

玉造川柳会（大阪市）西出一栄報

買物の重さに耐える編み袋　寿美司
バラの花アーチになった頃に枯れ　柳宏子
縄飛びにスタミナ捨てている若さ　文秋
出直すと決めてそこから引返し　古方
粋な人連れた座席でよく目立ち　金三
仕事着の隣の座席が空いたバス　清人
押し合って乗って結局立ったまま　季賛
年寄りへ座席譲って背中見せ　井平
お好きなようにと卓上の調味料　白柳
ハイミーを忘れた鍋の頼りなし　照一
一匙の調味へ舌が喜々として　光女
寒風にきたえた高野にある風味　あいき
寒風に灘は仕込みの米をとぐ　野菜
寒風をついてひた向き好きな道　貞山
寒風にハゼ釣る人の気が知れず　句念坊
凍てついて挨もとばず風の音　善一郎
受験の子待つ校庭の風寒し　静馬
北風へ夜店は寒う背を丸め　梅里
ドラマならもう倖せの来る生活　凡九郎
戦争のドラマ喜劇となる救い　天樹
メロドラマ独りの膝を固う居る　六童子
時代の差泣けるドラマを子が笑い　一舟
幕が降り互いに見合の顔になり　井平
美人では出せない味を女形出し　宏方
美となりたいドライヤーの熱に耐え　滋雀
美人薄命そんな明治も遠くなり　章雅
お高くとまり美人にとうがたち　一栄
あんなのが美人でつかと妬いてはり　柳志
白痴美と云う人の瞳のうつろなり　清子
美人画を眺めながら見えるとこに貼り　義介
別嬪に見せる鏡にひまがいり　静馬

南大阪川柳会　金井文秋報

ひったくりお前かいなと西成署　柳志
拗ねている朝はお茶までつぎこぼし　柳宏子
腹割って話せば笑い合える仲　玲人
好かん人などとにらんで寄りかかり　静馬
併願が私立へいどむ小手調べ　金三
円満なそぶりやっぱり恐いひと　梅志
良縁へがらり変った娘の素振り　一栄
堕ろそうか産もうか腹は容赦なく　好郎
裏目裏目と問題が出る入試　文秋
忠魂碑昔を知らぬ鳩が舞い　滋雀
中年の魅力惜しいがちとたるみ　痴亭
なんなんも酌げば記念の文字が冴え返り　小松園
口止めの素振りと万事心得る　恒明
思い当って受話器をひったくる夫　白柳
記念品特価に見せぬ包装紙　梅里
ぼろくそに云うて死ねば惜しい人　一舟
ひったくる袋にどきっとさせられる　古方
惜しまれて辞めればバッタリ忘れられ　吸江
入試の子供を拝むように出し　弓彦
特ダネを素振りに見せぬ事件記者　恭太
記念写真サーテここは何時何処の　凡九郎
素振りには見せず心の中で燃え　あいき
創業記念すき鍋つつく小企業　八郎
腹の子が動く動くとうれしがり　清人
日々ちぢむ惜しい余生へあせりが出　千梢
腹読んで読まれて交渉まとまらず　阿茶
ドサ廻り惜しい女形の色気みる　凡子
惜しいから拾う落穂にあらざるなり　薫風
死金は後生大事と腹に巻き　双楽
はったいな素振りお寝小の児が起る　十悟
妥結して互いの腹にあるしこり　清子
腹の立つほどうれしい人に合い　宣介
影もまた恋の素振りをくり返し　水客

小野田川柳会（小野田市）国弘半休報

床の間の松水盤にある力　笹舟
庭石がすわれば一本欲しい松　迦落
数の子も門松もなし寝正月　半休
勤労の指がお酌をてれて受け　羊歳
酌の手を待たせて祝辞まだ続き　素空
下座へも社長が酌ぎに来た機嫌　弘道
馬の足名人芸でも馬の足　千保
こだわりを打破して産ませ丙午　丘水
やかまし屋孫のオン馬で他愛なし　つとむ
過ぎた年値上げがトップ記事になり　純昌
同業者値上げ話は早く決め　涼水
お年玉ここにも値上げのムードあり　新雪
焼けふとる人ありふるえる人もあり　雪女

ウイロー社（ハワイ）築山快夢起報

肩書に前会長も見栄で刷り

見栄を張りうつかり喋って目の当り場　内海紅茶
世話人の顔で見栄張る寄附の高　暁舟
見栄があり働くのにも張りがあり　浅太
出しやばりは肩書だけの見栄をはり　カロ女
見栄捨ててからのワイフは日本晴　蒼蛇楼
あげ底に忙しい国民性の見栄　柳葉
諦めたつもり余生に残る見栄　泉水
見栄もなく泣く子へ乳房ふくませる　拝山
観光の故郷老後の見栄を張り　万里歩
女から見栄を外せば味気なし　快夢起
プナホーへ入れて居ますというも見栄　魔花麗
見栄張って娘の恋の邪魔をする　三石
見栄で喫う女房一服むせて居る　コブシ女
参観日見栄と見栄とのさぐり合い　辻白溪子

大鉄川柳会（大阪市）　辻白溪子報

手不足が月謝の腕を買うてくれ　たつみ
何でもない顔で月謝値上げされ　求女
差入れの菓子から詰所旅に触れ　永断
花代と月謝に追われる花を活け　季賛
視界ゼロ雪の屋島を見て帰り　杜的
岬大きくまわれば初日の海になり　水客
詰所から出て行く顔がひきしまり　精二
親馬鹿のお蔭月謝がまた入り　飛鳥
ゆく年へ今日舞い納め月謝置く　担水
美容体操ともかく月謝せびられる　静二
良人への遠慮高下駄背をちぢめ　ただし
表彰の額を詰所へ狭う掲け　白溪子
油くさい詰所の菊がきれいすぎ　軒滴

交通局句会（大阪市）　児島与呂志報

初夢はフジやタカにはほど遠く　春巣
金拾ろた初夢さもしい事を悔い　淡舟
尾も鰭もつけて初夢めでたがり　胡蝶
初夢はやはり故郷がよい夜行　漫多郎
初夢もやはり食う夢食べ盛り　清流
もつともな意見が馬の耳に風　三時
初夢へ希望大きく持ち直し　季賛
初夢の話に女房やいて居る　翠芳
子が山に行つて初夢気にしてる　のぼる
主人公だけがきれいな馬に乗り　ゴーゴー
馬そりを降りるを見れば女性なり　一乃字
初夢は素直な子供ばかりにて　孤舟
走馬燈我れをさみしくふりかえり　一歩
人工受精されてる馬にある不満　鉄児
鳥居から上りのきつい手を引かれ　正則
屋上の鳥居は社運を賭けた位置　凡々
天王寺鳥居で知られたセメン菓子　寿美
下馬せよとにらみ効している鳥居　松亭
用便をするなと鳥居塀に書き　みのる
あわて者似た者夫婦子を忘れ　鉄舟
あわて者良いことをして頭さげ　四六九
あわて者釣り銭取らず去んじまい　酔升
あわて者鼻と花とを間き違え　充博
あわて者母も承知のあわてよう　与呂志

備前川柳社（岡山県）

炭小屋に注連を飾つて里に降り　大陸
お社に合わして注連も太くなり　君子
家柄をちよつぴり見せたしめ飾り　伊久野
伸びる子が今年は注連に背が屈き　胡風
しめ縄に初日が昇る伊勢の海　一声
洞窟を神祕なものにさせる注連　飴ン坊
立ち小便する場所しめを張って　水仙
日めくりの丙の午が注連をつけ　卓美
しめ縄をくぐつて無我の手を合せ　浄美
注連飾り末広がりのように見え　文平
凶作の倉静まりてしめ飾り　笹舟
注連ゆれて百度参りを力づけ　照路
注連張った松新しい道を曲げ　芳月
注連縄に一年中をたのんどき　正洲
注連飾りとなりがはずすかねずし　久米雄
苗代を守つてくれるしめ飾り　秋月
大仏殿小さく見えるしめかざり　淡舟
二三行金をたのむと子のはがき　静子
御無沙汰を心で詫びたい送りもの　知水
飲んだときだけほめられる妻となり　初美

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

母います倖せ母の話する　伊津志
亡き母を思い浮べて落葉掃く　呑洋
初任給母の笑顔に迎えられ　蟠蛇
父ちゃんに内証と母の手が温い　松月
乳房吸う強さに母も強く生き　勝子
母さんの膝哀しみもきいてくれ　文子
未亡人母という名に強く生き　舞子
母の名にひそめ給いしおんなの血　紅雨
現金の使途が合わない刑事室　一歩
現金の魅力に負けるも小商人　松風
腰据えて飲めとたんまり持つて　夢生
馬買いに行く現金を腹へ巻き　妻山
血を売った金で都会の隅に生き　山里
無理乍ら続くくらしの昨日今日　柳翠
聖職を信じて婦長まだ独り　寛

和気川柳会（岡山県）　藤原秋月報

真直ぐに進めと二十才の子を祝い　一声

成人の記念にあすなろ植えておく　秋月
還らない人が残して行った傷　曙花
カレンダーあと一枚へ練る式辞　白水
枯れている老妓の達者なバチ捌き　佐加恵
偶然に美人と並んだ指定席　胡風
少女の眼廻り舞台に夢開く　知水
成人の心は青い空ばかり　久米雄
芸達者指名待ってたように受け　博友
入学式片親の子が哀れすぎ　恵雨
赤飯の湯気の中から笑い声　哲郎
祝杯にジュースのコップも合わせ　照路
此の人も味方と思ったのが不覚　寛子
金婚式牡丹に栄ゆる庭広し　正三郎
なまつばを呑んで祝辞がまだ続き　正州
病床の窓開け新春の空を吸う　笹舟
美人とも思えぬ顔で得意づら　三六
達者にも限度があったレントゲン　文平
式服の黒へ女の決意みえ　千代香
我が家の祝日小さい誕生日　正
学歴のないのが成功して戻り　義明
恩人を尋ねる為の途中下車　岩美
血は湧けどやはり路傍の石でした　あきら
人なみに揃えた嫁の荷が届き　伊久野
ひやかされ今日から大人の仲間入り　武夫
インテリの正論矢面には立たず　不朽
不断着で心の錦着る二十歳　松男

大阪逓信病院川柳会　森下愛論報

神棚に置けばおみきと名が変り　良夫
二人でも会と名をつけ呑むお酒　愛論
胚かじり飲ませば一升軽くあけ　草右
お酒まで飲まして詐欺にかかった　よしを
競馬狂帰りの切符も買っておき　蕗児
気まぐれの気休め気に入らず　没食子
気まぐれが気のむくままの一人旅　竹荘
気まぐれに降りて歩くいい月夜　史葉

岸和田川柳会　（岸和田市）

黒田節八木節鍋が煮えつまり　南風郎
ちやんと鍋の底をつついて夢があり　武助
手袋の片手が朝をてこずらせ　浪速子
手袋に持ち方があるモーニング　操子
果樹園の袋見事に実る秋　左久良
出鱈目も少しは入れて披露宴　加代子
出鱈目と思う絵もあり絵画展　かつらぎ
でたらめが運をつかんだ年の暮れ　加仙
ある時は自分に腹が立つ日記　瓢人
腹の虫おさまらないと夜更け酒　よし乃
親心息子の夜警気にかかり　庄一郎
明け方の月へ夜警の深呼吸　起人
夜警また子供の熱が気にかかり　きさ子

あすなろ川柳会　（大阪市）

かけ声のように手足がついて来ず　よしを
かけ声の小さいヤツにしてやられ　弓彦
ほころんだ花も写してPR　百酒
頼りない同士互いに頼り合い　福郎
繊細な感受性また高ぶりぬ　ゆきを
挽回に法すれすれの策を練り　百酒
映倫にすれすれと言うとこがうけ　梅里
栄転を厄払いしたと部下の口　双楽
栄転に持ち上げられておごられ　弓彦
萬骨を枯らして部長栄転し　よしを
栄転という赴任地の寒いとこ　ゆきを
横すべりですよと栄転うれしそう　梅里

関学川柳会　（西宮市）　中内孚彦報

泣声に心も悔いるあの叱咤　久柳子
出席があの娘の番で耳を立て　皆無
コーラスの基礎練習が耳につき　柳志
怒鳴られるはず怒鳴られぬ気味悪さ　凱子
こがらしの分教場にけむりのぼり　恵
ストーブに古き腕白思い出し　隆
ストーブで洗たく物をあぶる母　仙葉
受験生にストーブ向ける親心　鴎石
山小屋のストーブで靴の裏を焼く　白柳
成人になれば大人かこりや不思議　失礼
成人式実感などとはいうまいぞ　孚彦
徴兵検査はもうなくなった成人の日　すゝむ
成人になるのが怖いなとも思い　古方
成人の日の冬山は呼ぶごとし　薫風

むらくも川柳会（島根県）藤井明朗報

梅の花試練に耐えて清く咲き　一郎
梅匂う宵よ静かに句を思う　白汀
床の間で梅は気早い春を呼び　輝水
梅咲いた縁でのんびり茶をすすり　正朗
早咲きの梅にふんわりにわか雪　清泉
梅一輪さして見舞の友は去に　芳子
梅林の雪枯木に花のごと　澄水
ふくらんだ梅の小枝へ寒雀　勇
寒梅も暖冬異変知って咲き　鶏生
親の気も知らず呑ん気と鳴るエレキ　一郎
口先きは呑ん気眼玉にある野心　一柳子
養子です呑ん気に見えていて苦労　明朗
末つ子の伸びを呑ん気なせいにする　俊夫

しのびよる春のさきがけ春を呼び　冬樹

富柳会（富田林市）　阿部柳太報

開幕前手品も見せて村芝居　紅月
珍客はカビ臭いふとんに寝てもらい　六竜子
珍客は後妻しげしげみて坐り　東雲楼
珍客の帰つた日に届くすし　多佳子
珍客は気になる妻の男客　すみれ
珍客は蛍の光以来なり　摩天郎
珍客が来て縁談が一つふえ　重子
珍客がばらす昔の遊び場所　吸江
珍客と知らず新妻追い帰えし　静林庵
珍客の羽織袴へ肩がこり　八郎
珍客に皆丸出しの声となり　吉太郎
珍客に漬物の味賞められる　白面子
失業を知らず珍客あつかいされ　栄一郎
珍客へ機転の妻がありがたし　美房
珍客へ名前の順に子がならび　柳太
妻の珍客延々とぐちり合う　美代
珍客は心の隅にあつた人　花梢
珍客の泊るつもりをもてあまし　きはち
珍客を女房少し不安がり　白柳

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

金持の恋本腰と見てくれず　静波
本腰を入れてのれんの重さ知り　一人
間借りするくらしへ針の打ちどこ　弥生
本腰でやると短く電話され　圭太
商売が出来寒空に荷が軽く　孝子
寒空を仰ぎ澄みたるにおどろき　章子
今日も寒空妻のむなしき饒舌よ　史好
器用さが邪魔本腰入れられず　奈々
本腰で家計簿にらむ物価高　万竿
口喧嘩仲裁入つてなぐり出し　努
本腰でない試合にホームラン　ひとみ
本腰の今年へみくじ吉と出る　草春
本腰へ三日坊主とほつとかれ　与太郎
本腰を入れても内職たかが知れ　雪男
本腰を入れたがピエロとなり切れず　痴亭
本腰を入れた二浪の無精髭　吸江
夜遊びに入れる本腰店に欲し　一峯
凧あげの子に寒空へ引き出され　鬼遊
寒空に若さを誘う雪模様　生長
寒空を理由にデート断られ　のん子
古釘を蓄え果ては用ならず　喜風
抜き釘のつもり定年また勤め　好郎
釘打つて血豆のことは黙つとき　薫風
古釘をのばして家主やせている　白柳
腹立てて打てば釘までひんまがり　梅里

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

反対は筋を通すと肩が張り　立児
反対と言わぬが針の手をとめず　泉睦
反対の窓の景色が気にかかり　茂児
茶柱が立つておすえと妓のお世辞　瓢太
一番になつたら友達去つてゆき　千代
願いごと一つにしぼつて初まいり　美幸
抽籤の一番ちがいが捨てきれず　星斗
吉と出たみくじそのまま信じたし　睦子
初詣参道遅々も気にならず　扇里
よろしくと金も返さず賀状くる　雄幸
茶柱の立つた夫に死の訃報　裕児
もらいもの一番先は仏さま　トキエ
一番に着いてビラ張りさせられる　小松園
反対をさすだけさせて又値上げ　好郎

どんぐり川柳会（羽曳野市）　川村好郎報

不景気をもう忘れさす茶の間なり　白扇
春景気招く舞妓の髪の稲　利白
不景気が故郷への道を遠くする　功雄
一点の非のない縁談だから迷い　史好
迷い道丁寧な嘘で教えられ　努
不景気は二号までも持つてゆき　水泡
景気よく引き受けて来て叱られる　道夫
癒え近し景気よお前も上を向け　悟空
口つぐむ迷い子おまわりもてあま　早霧
丙午迷信とは云え気にかかり　寸歩
特売場迷つているうち人が買い　鬼遊
迷い子のママは特売で大奮斗　マサエ
不景気へ値切るお客にぐちならべ　生長
不景気に客は太子の顔に見え　一平
不景気でございますよと少しまけ　馬朝
不景気もみな甲斐性のせいにされ　金太
景気よく飲んだが浮ぶ妻の顔　雪貞
不景気が来ようが来まいが俺の恋　まこと
神武以来の景気に買つた株は落ち　ぶん子
不景気が主婦のへそくりぼり出し　直己
中絶に迷い産んだは男の子　万里
迷いより目覚め少年母の手に　喜風
迷いつつ出したレターにいい返事　芙蓉
肩を寄せ迷つて抜けるホテル街　若舟
仲人の話の好さに迷わされ　於千
アベックへお好み焼がこげており　重夫
夜が明けりや迷うた夢が馬鹿らし　好郎

城北明老会（大阪市）　田中多幸報

赤い口うちの娘も年頃か　清江

黒髪を赤毛に染めた初姿　富士
お正月看護婦の紅濃く見え　独水
赤ちゃんと呼んでた子だが好男子　喜久
新婚の室に赤ランプのムード　忠男
赤い実をつけた南天初姿　芳子
正月は胃もふところも赤信号　繁子
赤信号止る車に気を使い　ふさ
四苦八苦赤字にならず年を越し　久子
赤色が羽根に染まつている平和　一登
三人目も男で赤いものを着せ　弘生
今年こそ赤字追放とそ祝う　多幸
口紅のついた盃なめて飲み　柳生
空赤く焼けて鰯の船を出し　源川
卓上の赤いリンゴが絵の相手　久江
赤い顔大きな顔の三が日　衛

たけはら高校生卒業生記念句会

弟もおもちやのくんしゅう大事がり　洋子
水餅はうまくないやと十も食べ　康広
星を見て何をお願いしようかな　浩
社会人になつても子供とよく遊び　勝彦
かわい子にきたない小犬だかれら　日出夫
あの人も就職私もつりこまれ　浄美
雪だるま砂もまじつて出来上り　悦子
バスに酔い他人の親切身にしみる　恵津子
小言きく父にお茶ついであげ　延子
ついに来た社会人への腕が鳴り　万司
卒業へただ「ありがとう」云るだけ　清
人生の厳しさやつと判りかけ　憲次
青空のように果立つ日の心　潤
母さんに小遣いなんぼあげよかな　和幸

モデルにも仕立てみたい好な人　文平
雪だるま二つ作つて母がなし　左馬
女房は多産系だとおどすなり　春男
忍従の美徳を冬の陽にさらす　和尾
パチンコへ寸暇を惜しむ市場籠　松風
寡婦悲し生き抜くための隙も見せ　扇水
海の風もうふるさとが近くなり　鬼焼
食堂の昼朝刊を巻いて読み　俊健
凍てつく道でブレーキ慌てさせ　一路
父母を呼べどこたえぬ東京湾　不動
どなたですかへてれてする返事　酔法
我家にも春縁談がもちこまれ　雅鳳
本当の悩みへ時計も止つとり　春昇
そわそわとさせてあの人通りすぎ　笹舟
パパになる産室からも追い出され　松緑
冬の夜の詩情義足の音が断ち　不朽
大根を売つての肉がこれつぱち　菁居
鼻唄がコーラスになるピクニック　呑竜
あるやなし柳に春の風が生き　政己
栄転と言えば聞こえのいい左遷　静火
鼻唄が出て子供等にひやかされ　正
ミスの気でいればオフィスうまがあう　そのみ
仲人の位置で高砂聞き直し　房枝
生捕つたねずみの瞳へすまない気　澄恵
調理器へ任し切れない主婦の味　操子
そわそわとするだけ小遣い言いそびれ　凡女
その声へ立つより返事と子に教え　房子
惜しまれて果立つ柳の子を信じ　静水

オーエスケー川柳会（大阪市）　形水報

追い抜かれやすぎれのクラクション　田畑
カーブーム親の必配一つふえ　専務
自動車にたのんまつせと声をかけ　岸本
ドライブにうしろのダンプ気にかかり　高田
自家用に乗った気持ちのレンタカー　渡辺勇
自動車をクイズで当てたが免許なし　辻村
ユーとミーデートはいつもキャデラック　渡士
鼻歌の運転うしろにパトカーが　大山
ラッシュ時は車も歩くも変りなし　酒井
NHKより正確な腹時計　上田
新築に貫つた時計よく止まり　形水
時計なら合つているのが常のはず　平野
ひけ時に時間にあわて忘れもの　青谷
初出張時間気になり眠られず　南
遊園地四季を思わす花時計　前田
チクタクのリズムでほうきかるやかに　香川
ためそうと防水時計を水につけ　渡辺美
時計見て飛んで起きたよ給料日　佐藤

宴会・折詰・出張パーテイ
大勇
阿倍野区松崎町
TEL (62) 5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (21) 9184

・2DK・

★陽春四月、満開の桜ではないがページがご覧のようにギッシリつまってしまった。投句がふえたのだ。この分だと毎月ふえる一方なのでいよいよ増ページでもしないと追っつかなくなる。

★前号の東野大八氏のページに、裏ケイより太いセンがあがったほか、数ページにわたって、ぶざまなところをお目にかけたことをおわび申しあげます。

★むかしのぼくなら印刷所へどなり込んだはずだが、やっぱり年かなァ。航空機もよく落ちるが本職の腕前もグンと落ちっぱなしだ。

★前号で明るい話題は「よくぞ女に生まれける」の特集だった。これは評判がよかった。これからも同人諸氏にはドンドン書いていただくつもりだが、どうやら「同人特集」は本誌のカンバンになりそうである。

★多くの原稿を抱いたまま後記を書くのはつらい。

☆一年じゅう徹夜で仕事をする者には春から夏がありがたいデス(不二田一三夫)

・募集・

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選

近作柳樽（10句）　北川春巣選

課題吟（各題10句以内）

「大役」　高崎雄声選

「雨」　桜川不水選

「母校」　市場没食子選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

七月号発表（5月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選

近作柳樽（10句）　菊沢小松園選

課題吟（各題10句以内）

「表紙」　久家代仕男選

「かげ口」　藤井明朗選

「男」　小西無鬼選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳筥をご使用ください。

本社四月句会

日時　四月八日（金）午後六時

会場　自安寺（妙見さん）
市電千日前下車スグ北側
（電話211・1478番）

話　川村好郎

兼題
「人出」　菊田いさむ選
「耳打ち」　内藤きさ子選
「非力」　吉田圭井堂選
「見る」　西尾栞選

席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句

会費　百五十円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪(271) 3985番

5月の兼題
「不器用」「デラックス」
「動物園」「深い」

定価　百二十円（送料六円）
半年分　七百五十円（送料共）
一年分　千四百四十円（送料負担）

昭和四十一年三月二十五日印刷
昭和四十一年四月一日発行

編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎

印刷所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　大陽印刷株式会社

発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座・大阪・三三三六八番

毎日の健康管理に

活性アミノ酸製剤

アスパラ

常用に アスパラ・L　お子様を強く アスパラ児童用

目の健康に アスパラ目薬　大型内服液 アスパラC

◎健康づくりにアスパラ効果

アスパラは、体じゅうの細胞内で働き、生命のカギをにぎる酵素を活気づけ、疲労素をとり除くなど、新陳代謝を活発にします

ぜひ毎日お続けください

料理も電話も 551 ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理

豚饅 蓬莱 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心斎橋そごう店・梅田阪神百貨店

天満東阪ストアー・弁天町西港店・中之島サン・ストアー

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十一年三月二十五日　印刷
昭和四十一年四月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔　四月号

定価　百二十円（送料六円）

万国博開催記念・世界めぐり　太陽とロマンの国
あやめ池中南米博
3月19日～5月29日
主催　毎日新聞社
平方メートルの大遊園地
円型大劇場
野外劇場
あやめ池駅前が会場
180円
90円
近鉄あやめ池遊園地

一番よい酒
うまい酒
菊正宗